



YAMADA
NAOKIMI

N. Yamada

NO. 88
2015.1

農工通信

*The Graduates' Association of
Tokyo University of Agriculture and Technology*



東京農工大学同窓会
<http://www.tuat-dousoukai.org/>

TAT



農工通信 No.88

目次

〔特別企画〕

西川公也農林水産大臣に聞く	亀山 秀雄	化工S48	1
東京農工大学創基140周年・同窓会創立50周年 合同記念式典 ～「来賓祝辞」より～	ギナンジャー・カルタサスマタ	工化S40	2

I 時代を顧みる

I - 1. われわれの学生時代

1. 生協誕生前後の裏話	大和田 宏	農 S31	3
2. 後期高齢者が母校に感じること	小峯 賢	林 S35	3
3. 繊維工学科からみた農工大の歴史の一コマ	深水 智明	織工S38	5
4. 母校への思い～間違われ続けた人生～	藤本 修身	農化院S46	6
5. 東京農工大学と宇都宮大学（東京と地方）	齋藤 高弘	連農生H4	7

I - 2. 誇りに思う農工大

1. 遙かなる砂川事件	高柳 昭吾	織化S35	8
2. 思い出すのは農場のある大学	藤本 和弘	林 S50	8
3. 農工大で見つけた私の座右の銘	中野 伸一	環保H1	9
4. 高専から農工大に編入学して、いまある自分	谷口 浩成	工博電H15	10
5. 工学部生命工学科の風景	佐々木伸大	工博生H17	10

I - 3. 忘れ得ぬ仕事

1. 75年が過ぎて	小泉 昌之	織工S38	12
2. 大学入学から半世紀を顧みて	鈴木 勝美	織化S38	12
3. 仕事と人生をつなぐ研究室の絆とエコロジー	細村 弘義	林産S45	13
4. 雪上のカーチェイス	飛澤 美雄	機械S48	13

II 同窓の輪を結ぶ

1. クラス会	西田 晴二	獣医S41	16
2. けやきクラブ同窓会サロンとしてー	渡辺 彰	農工S43	16
3. 50年振りのグリークラブ演奏会	栗原 康明	工化S43	17
4. 林学林産音楽同好会？	横田 堯	林産S44	18
5. 富山支部の悩み	小杉 啓一	林 S54	19
6. 囲碁部へのエール	大橋 統州	農 S54	20
7. 同窓会への思い	斉藤 一夫	織高院S61	20
8. 55年後の同窓会開催を目指して	田中 祐圭	工博生H20	21

III 出会いを活かす

1. 還暦を過ぎて森林調査	本山 芳裕	林 S48	22
2. 二十歳の魂	山田 尚公	林産S55	22
3. 飛行機中年（…初老？）と素晴らしき人々との出会い	藤本 朗	機械S57	24
4. アフリカで長年ご活躍されている堤 可厚氏の講演を聞いて	対馬美香子	獣医H2	25
5. 子供たちの笑顔に癒されて	岸本 亮	応生H7	25

IV 技術・研究を語る

1. 一生繊維	千葉 茂雄	織工S38	27
2. 婦人靴下（ストッキング）の変遷とともに	本田 泰信	織工S38	27
3. ナノって何ナノ？	伊東 巖	工化S40	28
4. 家庭園芸のすすめ ～思えば遠くへ来たもんだ～	肥土 邦彦	農 S48	29
5. 環境版「インタープリター」の勧め	大塚 昇	化工S49	30
6. ブリヂストーンに入社して担当した技術開発	西川 智久	織高院S61	31

V 趣味を楽しむ

1. 庭にある樹木達	齋藤 道雄	農工S26	33
2. 団栗と戯れること	橋本 裕	林産S47	33
3. 還暦準備の思わぬ収穫	照井 俊	織高S52	34
4. 銭湯との縁～時に癒され、時に働き～	弦間 悠造	MOT H24	35

VI あの地この地

VI - 1. 素敵な国々

1. カンボジアへ同級生との珍道中	市瀬(村田)和繁	織高S52	36
2. 赤道直下より	谷本 哲朗	環・資H6	37
3. 世界一暑い国から	村瀬 美美	地生H20	38

VI - 2. 魅力の日本

1. 八重山諸島への旅	鎌田 佳伸	織工S37	38
2. 尾瀬と私の昔と今	石井 久雄	林 S52	39
3. まだまだ続く伊勢神宮の賑わい	古野 優	獣医S60	40

VII 海外ねっとわ〜く

1. 卒業50周年を迎え、その一昔を思う また、日本の私達への多くの貢献は忘れられない	鐘 維源(台湾)	工化S39	11
2. T U A T - I miss you 東京農工大一俵ばれる Nguyen Ngoc Quang (ベトナム)		環・資院H22	14

VIII 復興への途

1. 福島第1発電所事故で考えたこと	吉田 守	化工院S50	32
2. 福島の真実 (いま)	高山伸之介	地生H11	41

IX おもいで話

1. Communication 三題	高島 貢	名誉教授(電気工学科)	23
2. 父(清水賢)との約束	清水 直	電情院H11	26

広告	42
事務局だより	43

表紙絵 「阿修羅」

山田 尚公
(林産S55)

有名な興福寺の阿修羅像は戦いの神でありながら、美しい少年のような優しい顔立ちです。もともと阿修羅は正義の神ですが、それに固執し続けると善心を見失い妄執の悪となります。宮澤賢治の「雨ニモマケズ」に「北ニケンクウヤソシヨウガアレバ、ツマラナイカラヤメロトイヒ」とあるのを思い出します。戦いの果てにある虚しさをあのように表現した昔の人の英知には驚くばかりです。

祝 西川公也農林水産大臣に聞く



2014年9月、東京農工大学卒業生の西川公也さん（同窓会顧問 農工院 S42）が第56代農林水産大臣に就任されました。公務で多忙極まる中、貴重なお時間を頂戴し、日本の農業や母校・農工大に対する思いなどを語っていただきました。

《2014年10月17日》

聞き手：亀山秀雄（化工 S48）

同窓会常務理事 広報・情報部長

——：おめでとうございます。農工大の創基140周年記念祝賀会でのスピーチを拝聴させていただきました。日本の農業振興に強い思いで臨まれておられ、併せて農工大に対する期待を述べられたことが大変印象に残りました。まずは、農林水産大臣としての農業や農工大に対する思いをお聞かせください。

西川：私は長い間、農政一筋に、ライフワークで日本の農業を変えようとやってきたんですね。いろいろと問題がありますが、私は、若い人が農業に帰ってくるような施策が必要だと思っています。それには、一番必要なことは農家の所得をどう上げていくかということだと思います。日本が食として口にするときの農林水産物の価値は、90兆円を超える額ですが、日本の農林水産業の所得は12%程度です。ここを何とかしたいですね。

——：生産から流通まで視野に入れたいいわゆる農業の6次産業化ということでしょうか。

西川：そういうことです。これまでの農林水産行政は、ややもすれば、生産に偏った施策を推進してきた一面があります。これからは、農業者と周りの産業がうまく連携して、新たな需要を切り開き、農業者の所得を増やしていくことが重要ですね。世界に誇れる高い品質を有する我が国の農林水産物・食品について、アジアのみならず、より購買力の高い人口を多く擁するEUや米国などの市場も重視し、輸出を促進したいと思っています。

——：大臣自ら売りに歩くということですか。

西川：そういうことになりますね。もちろん、農業の競争力を図るため、生産現場の強化も重要です。

——：農工大の役割もますます重要になりますね。

西川：大いに期待しています。

——：農工大同窓生の多くが地域の農政に関わっているのを良く目にしますが、同窓生の活躍について感じられていることをお願いします。

西川：農水省にも農工大出身者が活躍していますよ。特に女性が頑張っていますね。辻山弥生さんは頑張っていますね。食品の安全性と品質に関する国際的な基準を定めているコーデックス委員会の副議長をしています。獣医学科出身で審議官をされている方もいます。この省は、ものづくりが得意ですが、マネジメント人材も必要です。これから農工大出身の局長クラスがどんどん出てくれることを期待したいですね。食料産業局長になられた宇都宮大学出身の櫻庭英悦さんなんかを見ていると、とてもアクティブに活躍していますが、あのようなアクティブに動ける人も農工大で育ててほしいですね。

——：工学部に何か一言ございますか。

西川：やっているかもしれませんが、自動運転技術や水素エンジンのような最先端のテーマに取り組んでいただきたいですね。農工大は場所もいいですし、成績もいいですから、やはり「大志をいだけ」というような気持ちで、先頭に立ってやるんだというような気持ちを持つ学生を育ててください。

——：教授についてはどうですか。

西川：教授の皆さんも遠慮している。国の審議会などにも出てほしい。研究で忙しいのかもしれませんが、東京大学もどんどん出てきていますよ。研究も大事だと思いますが、もう少し外を見ることも必要だと思います。そのうち、農工大の教授たちに頼みに行こうと思っています。

——：大臣は栃木県出身で、大学院修了後は、栃木県庁に入庁され、それから県議会議員（5期）を経て、衆

議院議員を5期務められておられますが、農工大同窓会の栃木支部への思いをお聞かせいただけますでしょうか。

西川：栃木支部は良くやってくれています。会長の村松梅太郎さんは、私の1級上ですが、良くやってくれています。また、皆さんよく集まっていますね。私は、長くはられないのですが、毎回出席しています。村松さんは、空手部の先輩でもあります。しごかれた仲間です。

——：日本空手協会の栃木支部の最高顧問もされていますね。

西川：そうなんです。たまには道場に行って正座だけでもやりたいのですが、SPがついていますので、難しいですね。

——：でも、大臣のお仕事は健康管理が大切だと思いますが、今はどうされていますか。

西川：これまでは、朝の散歩が運動でしたが、今はSPがつかないと外に出られませんのでやっています。その代わり（裾をまくって見せてくれながら）このように登山用のベルトをして足を鍛えています。

——：最後に何か一言あれば、お願いします。

西川：大臣の職を預かった以上、日本の農業を必ず成長産業になるようにやって見せますよ。林業もこのような立派な家具（テーブルをたたきながら）を今までは海外に売っていなかったんですよ。こんないい板、日本しかできないですよ。こういうのも売り込めと林野庁に言っているんですよ。ファーストフードがありますね。今、ファーストフィッシュというものもやって、魚を簡単に食べられるようにといろいろとアイデアを出し合っているんです。

——：どうもありがとうございました。

◇◇◇◇Interviewer Memo◇◇◇◇

短時間ではありましたが、お話をお聞きした後、直ぐに取材班との記念写真をお撮りになり、また後日、自筆の色紙も3枚お贈りくださいました。西川大臣のご活躍をお祈りしたいと思います。

◇◇東京農工大学創基140周年・同窓会創立50周年
合同記念式典 盛大に開催◇◇
(2014年9月19日／府中の森芸術劇場)

～「来賓祝辞」より～

ギナンジャール・カルタサスミタ（工化S40）
インドネシア共和国大統領諮問会議委員

私は54年前に訪日し、東京農工大学に留学しましたが、本日、こうして皆さんと一緒に創基140周年をお祝いできることを大変光栄に存じます。留学当初、私は農業分野を勉強するつもりでしたが、一年目の一般教養を終えた後、工学を専攻することに決め、府中から小金井のキャンパスへと移りました。私はエンジニア（技術者）としてキャリアをスタートしましたが、論理的思考と正確な仕事求められるエンジニアとしての経験は、その後、母国で官僚、政治家、行政学の学者になった際にも大変役に立ちました。

私は31年の間、連続して公的なポストを務めました。恐らくインドネシアでは最長ではないかと思えます。こうした功績は半世紀前の農工大への留学時代があったからこそ成し遂げられたことだと考えています。

大学は、より良い社会、より良い未来を実現するべく、人々の視野を広げることが求められています。我々が現在、そしてこれから直面する問題は、私が大学生だった

頃とは大きく異なっています。私は、ハーバード大、早稲田大、政策研究大学院大での教授や客員教授を務めた経験から、全ての高等教育機関はグローバル化する世界と向き合わなければならないということを理解しました。そして、これらの大学は何れも同じようにグローバル化する世界に向き合い、外国人の教授、及び学生に扉を開いて、世界中から可能な限り最も優秀な人材を集めています。高等教育機関、ビジネス界、また社会に於けるグローバルリーダーを輩出する技術リサーチとイノベーションの国際的なセンターになる為の挑戦です。

過去50年間、日本はインドネシアの発展に大きく貢献してきました。日本の政府開発援助（ODA）はインドネシアのインフラ、教育、医療、そして制度面での開発を支援してくれました。実際に私自身もこれまで様々な役割において、国作り、そして近代化のプロセスに深く関係してきました。そして今、インドネシアと日本の協力関係は次の段階に差し掛かっています。これからは援助ではなく、モノとサービスの貿易により重きが置かれるべきです。今後、二国間の協力関係は高度な人材、技術、付加価値の連鎖によって構築されていくべきなのです。インドネシアは既に、知識に基づいた革新的且つ創造的な経済の発展段階に入っています。私達は、今後20～30年の間に日本と韓国がたどってきた先進国への道のりを歩んでいくのです。私は農工大が二国間の協力関係の更なる強化の為に重要な役割を担っていくことを心から期待しています。

I. 時代を顧みる

I-1 われわれの学生時代

1. 生協誕生前後の裏話

大和田 宏 (農 S31)

農工大生協は、昭和28年12月、大學自治会解散の危機の中で生まれた。農工大生協の正史の中では触れることはないであろう草創期の状況を後世の人に伝えておく。

1 血のメーデーと学生運動

私が入学したのは、昭和27年。朝鮮戦争の最中で、立川からはB29爆撃機が毎日飛び立っていた。東府中には米軍の極東空軍司令部があった。共産党幹部には逮捕状が出ていた。その共産党は、徳田球一の主流派と宮本顕治の国際派に分裂していた。主流派は武装蜂起を主張していた。大學には民主青年同盟（略称民青）というグループがいた。これは共産党青年部のようなものだった。大學は定着オルグの養成所だと公言する。5月1日、皇居前事件という血のメーデーとなった。自衛隊となる前の警察予備隊を指して学生たちは再軍備反対をスローガンに都学連を中心に数千人が警官隊と衝突し乱闘となり死者も出た。農工大からも多数の学生がデモに参加していて、深夜に、服は破れ頭から血を流した者が駒場寮に帰ってきた。仇はとってやるぞと負傷した学生たちに呼びかけた。警官隊の武器に対抗するために武装するしかないとして火炎瓶を研究した。5月30日、メーデーに参加していなかった学生たちと新宿・歌舞伎町に集まった。牛乳瓶で火炎瓶を作り、出発前に試しに校門前で投げたら、農工大の看板に焦げ目ができてしまった。2千人がスクラムを組み4千人の武装警官隊とぶつかった。ピストルの音がした。催涙弾をまともに食らうと、やけ火箸を目ん玉に突っ込まれたような猛烈な熱さと痛さでとても目を開けていられない。やむなく後退した。国鉄新宿駅の駅員が黙って改札口を空けて誘導してくれたので、国分寺まで無賃で帰ることができた。この日板橋では3人が射殺された。

2年生になったとき、自治会の委員長になり、共産党主流派に疎外されていた宮本顕治に肩入れする全学連に加盟して、民青と反対の路線を選んだ。

2 協同組合の設立

学園祭のとき、柔剣道場の武徳殿で津田塾の学生6人にあんみつを作ってもらい売ってみた。飛ぶように売れた。当時は、軍国主義につながるとして、柔道や剣道は禁止されていたが武徳殿には大きな神棚があって神聖な場所だった。数日して学長から呼び出しがあった。さては、武徳殿を遊興飲食の場に使うとは何事かとお叱りかと覚悟して出頭した。「君は津田塾の学生を使ってあんみつを売ったそうだな」「ハイやりました」「この間、三多摩地区の学長会があり、東京女子大の学長からこの次はうちの学生を使ってくれと言われたから」。これでお構いなしとなった。これをきっかけに、私の関心は自治会のことよりも協同組合設立に向いた。心配なのは跳ね返りの民青だ。協同組合など、体制内延命を図るプチブルの修正主義だと反対されたら厄介だ。地下組織の共産党府中委員会を訪ね、当局の弾圧はこれからますます激しくなり、学生自治会には解散命令が出るかもしれないそうならば、経済を基盤にした自治組織の存在は、自治会復活の芽となると説明して、協同組合設立は邪魔しないことになった。

農学部には、教職員の互助会のような購買会があって、わずかばかりの文房具と付属農場でつくったポマードなどを売っていた。代表は高嶺先生だった。協同組合を作りたいと相談したら、この購買会を発展させればいいと賛成してくれた。高嶺先生を理事長に、私が専務理事になって、一口500円で教職員や学生に出資してもらった。当時の授業料は月500円だった。拠点を武徳殿に飲食もできるようにした。スタッフには購買会の堀江さん、新たに松山さん、新味さん、夏莉さんの女性群が加わった。堀江さんとは永く年賀状だけはやりとりしていたが、3年前に亡くなられた。松山さんはお姉さんがバレー団を主宰していて、ときどきバレー鑑賞に誘われたものだった。

2. 後期高齢者が母校に感じること

小峯 賢 (林 S35)

本学は確かに知る人ぞ知る存在である。しかし、国立大屈指の伝統（7番目？）を有するにしては、世間一

般のプレゼンスが薄いと見えよう。

出身校は、と問われて「東京農工大」と答え、「東京農大」と間違われた経験はおそらく大多数の卒業生がお持ちであろう。私自身も高校教師として赴任した当初、「ああ、ユタカヤマと同窓ですね」とか「ダイコン踊りはできますか」などと言われたものだ。尤も、農学部同期生で教師になったのは、私を含めてたった二人の時代故に、特にこの世界では耳慣れない校名でもあったらしい。

管理職になってからも、然るべき名簿の目立つ所に、「東京農大卒」と誤記され、一時期は本学卒業生と目されない悲哀を経験した。なぜ、これが「悲哀」かと言えば、卒業生は結局、母校への帰属意識をもって「寄る辺」を求めるからだ。特段の利害関係はないだけに、この結びつきは断ちがたく大切と思っていた。だからこそ、この自分の「寄る辺」を頼りなく感じた次第である。

それに私たちの世代の本学は、いわゆる二期校であった。しかし、東大や東工大に入学してもおかしくない者も多かったから、学力レベルは結構、高かったし、入試でも多くの学科が実競争率10倍を超えていた筈だ。これは、定員の数倍を水増し合格者とする私立大のそれとは重みが違う。従って、有名ではなくとも、実力の程を自認していた学生達には、結構、誇り高いものがあつた。因みに、農学部同期生には二人の女子学生が居られたが、ご兩人共に才媛であつた。ひいき目もあろうが、ある教授が「農学部最高の学生たち」と言ってくれたことを披露しておく。

しかし、世間一般は本学を正当に評価しないのみか、国立大学であることも知らないという現実があつたから、卒業生はそのギャップを常に不本意に思っていた筈だ。本学の卒業生とは知らずに、後輩たちにその出身校をたずねた際に、「東京農工大」と言うその返答に何となく自嘲気味のトーンを感じるのが気になる。「母校の名を言ったところで、分かって貰えそうもない」というところか。当方もOBである旨を名乗ると、安心して(?)相好をくずすのが印象的でもある。

尤も、社会人としては「個」こそ大切なものだから、何処の卒業生とされても気にならない、と言う毅然たる方も居られよう。しかし、大学の立場から云えば、「社会の中に生きる大学!」という実利的・経営的の視点が必要だ。実力のほどはともかく、その大学が通俗的な意味であれ、大衆に膾炙されなければ、結局、優れた受験生は徐々に遠のき、大学の質も低下してくるからだ。私にはその意味から、この名称は本学の発展のためには、多少なりともネガティブに思える。たわいない事柄に見えようが、単

に、「泥くさい響きだから」という感覚からではない。

「農工」の二文字は、両学部の存在を的確に表しているように見える。しかし、「農」の字が工学部を含めた学校全体の性格を形容しているように感じられ、「農業的技術の学校」なるイメージを与える場合もありそうだ。少なくとも「あの人は農業の大学を出たらしい」～これが本学卒業生全体に対する世間一般のイメージになり易い。しかも、現在の農学部の教授内容・研究内容はといえば、各専門分野が多様化して、境界が不明確になったので、農学プロパーの枠外の分野が広がったようだ。故に、この名称は本学の実態と微妙に乖離して硬直化しているようにも見える。

両学部自体の名称はこのままとしても、この辺で本学の名称は「農」と「工」の二文字をはずして、両学部の特徴をカバーする普遍的(?)なものに改称すべきと考えるが如何。尤も、「農工」の名は戦後60年以上にわたって、然るべき領域には浸透してきた筈だ。従って、改称によるデメリットも少なくないし、それに、いまさら適当な名称を考えるのは難義だと言われれば、改称の是非は即断できない。しかし、ネーミングの大切さが再確認され、検討されてもよい。

ところで、一部の受験校を除いた一般の高校生にとって、本学の存在は殆ど認識外と見えよう。「神宮の森にこだまする応援歌」などには無縁な少人数で地味な「研究的大学」のためもある。一方、38年にわたり高校に奉職した我が身の経験からは、本学のパンフ類が目に触れたことはない。ただし、一度だけ、農学部キャンパスの空中写真が載る見事な入学案内を見て、我が意を得たりと思ったことがある。インターネットを開かせるのも良いが、高校へ積極的に情報を下ろす必要がある。キャンパスの美しい写真を見せるだけで、イメージが変わる筈だ。

母校関係者の活躍を見るのは良きものだ。殆ど、新聞、TVによる他はないが、BSEや鳥インフルエンザ等のニュースが飛び交う度に、この辺で母校の先生方が登場するのではないかなどと期待したりする。近年、嬉しいのは、遠藤 章特別荣誉教授が米国のラスカー賞を受賞し、ノーベル賞の有力候補者になっていることだ。また、古くは、かつてRNAの逆転写の研究で、実質的に中心的な役割を果たした水谷 哲氏(S37 農化)を思い浮かべる。後に知ったが、彼は私と在学時期が重なっていたらしい。ノーベル賞とはすれ違つたが、今では我々が誇る人物の一人であろう。OBとしては、この種の良いニュースを常日頃から期待しているものだ。

私が勝手に希望として抱いている母校へのイメージ

は、やはり「学問の府」であることだ。

そのためには、あれとこれについては農工大に頼れば用が足りる、と世間に思わせる芯の如きものが必要かと思う。卒業して3年位のこと、ある見識豊かな農協の幹部が「農工大ですか、じゃあ、農業経済の大谷省三さんがいますねえ」と声をかけてきた。一方、ある理科教師には「あそこには昆虫の石井悌さんがいましたね」と話しかけられたこともある。これには我が意を得たりという気持ちになり、母校の重みを感じて、嬉しくなったものだ。

以上、後期高齢者のOBの身である故、見間違いやら独りよがりも少なからずあろう。しかし、母校を大切に思う気持ちから、この駄文を弄した次第で、不遜なところをご容赦いただきたい。

3. 繊維工学科からみた農工大の歴史の一コマ — 繊維工学科卒業後、半世紀を機に —

深水 智明 (織工 S38)

農工大（特に工学部）の大きな変革の一コマである繊維工学科（当時）の変革について、卒業半世紀を機に振り返ってみます。繊維工学科の変革は、おそらくは農工大変革の端緒の一つであったであろうと思われる。その変革の課題は学科のあり方、繊維工学科のカリキュラム等であり、それらに学生間で問題提起しました。その経緯は「繊維工学会誌」(1961年、1963年発行)

繊維工学会誌 第3号 (1961年)

特集 繊維工学科はいかにあるべきか

1. 繊維工学科の現実と将来 (教官と学生との座談会)
2. 曲がり角の繊維工学科 (繊維工学系他大学*との比較/アンケート調査) *東工大、京都工繊大、名工大、信州大、群馬大、岐阜大、山形大
3. ・繊維工学への希望 (学生寄稿)、・繊維産業の現状と将来及び繊維技術の展望、・先輩の意見等



巻頭言	1
一 繊維工学科は如何にあるべきか — 教官と学生との座談会 —	5
二 曲がり角の繊維工学科 — 他大学の比較 —	18
三 先輩諸氏の意見 — 他大学の希望 —	50
四 繊維工学への希望	42
五 繊維産業の現状と将来及び繊維技術の展望	46

* 東京大学、京都大学、名古屋大学、信州大学、群馬大学、岐阜大学、山形大学

第4号 (1963年)

1. 第2回 繊維工学科、教官と学生との座談会
2. カリキュラム問題について (学生寄稿/2件)
3. 化繊メーカーの紡績技術者の立場 (OB寄稿)

の記録とOBの記憶に鮮明に残っております。

1960年代、日本の繊維産業（主に天然繊維の加工業）の衰退、合成繊維をはじめとする新しい技術・産業の台頭、国際貿易地図（アジア市場の拡大、EEC（当時）市場の展開）の変動時期でありました。

このような環境の下、学生は就職を含めて、自分の立ち位置に不安を覚え、学問の変革（その一部としてカリキュラムの見直し）を求め、これまでの実学的指向よりも学術的・方法論的な学問（ex. 化学、材料学、機械工学等）を求めることを訴えたものです。ちょうど、この時期、農工大は繊維学部から工学部への移行が進められた変革の時期でもありました。

その後の農工大工学部には、繊維工学のような実学はなくなり、大きな変遷を経たことは周知のとおりであり、当時の繊維工学科の学生が指向した方向を辿ったようであります。

1. 繊維工学会誌からみた当時の繊維工学の問題

繊維工学会誌には、繊維工学科の問題点やその置かれている立場が如実に示されております。当時、繊維技術研究の日本のトップ的存在であった農工大から、他の大学（繊維工学科）よりもいち早く「繊維」が消えたのであります。そのような状況下で、当時の繊維工学科の学生が、学生の浅知恵でもあったかもしれませんが、何を考え、どのように行動したかを「繊維工学会誌」(発行 1961年、1963年) からレビューしてみます。

2. 1960年代、学生は何を考えたか!

① 学生はどのように考え、行動したか。

・繊維工学科のカリキュラムを問題化した。・教官と学生との議論（座談会）の場（2回）—先生方も多く参加され、同じ土俵で議論。・他大学（繊維工学系7大学）へのカリキュラム調査とそれに関するアンケートを実施—（結果）他大学の問題意識の希薄さを知る。・繊維工学会誌に「繊維工学」の問題（カリキュラム等）を特集及び繊維業界、繊維技術の展望記事を掲載し、学内世論にアピール。

② 学生の行動の背景・理由

前述のように、日本の繊維産業（天然系繊維の加工業）の衰退という大きな変動期にあり、繊維メーカーによる繊維工学よりも化学、機械工学、電気工学等のニーズの増加

繊維工学科はいかにあるべきか

一、繊維工学科の現実と将来

— 教官と学生との座談会 —

出席者 藤田 賢一 (東大) 吉田 隆一 (京大) 中井 隆一 (名大) 山本 隆一 (信州大) 山本 隆一 (群馬大) 山本 隆一 (岐阜大) 山本 隆一 (山形大)

二、カリキュラム問題について

出席者 山本 隆一 (信州大) 山本 隆一 (群馬大) 山本 隆一 (岐阜大) 山本 隆一 (山形大)

三、化繊メーカーの紡績技術者の立場

出席者 山本 隆一 (信州大) 山本 隆一 (群馬大) 山本 隆一 (岐阜大) 山本 隆一 (山形大)

学 科 目	必修	選択	学 科 目	必修	選択
解 析 字	I	4	機 織 物 性 論		2
統 計 字	II	4	機 織 試 験 法	4	1
工 業 数 学	字	4	力 織 機	4	4
機 械 学	何	2	製 織 準 備		2
数 学	演 習	1	機 織 織 造 論		
力 学	特 論	2	機 織 織 造 論		
熱 学 及 び 熱 力 学	字	2	機 織 工 学 実 習		2
光 学 及 び 分 光 学	字	2	機 織 工 学 実 習		4
量 子 物 理 学	字	2	機 織 工 学 実 習		2
原 子 物 理 学	字	3	機 織 工 学 実 習		
材 料 力 学			機 織 工 学 実 習		
機 械 製 作 法		3	機 織 工 学 実 習		

(就職問題) や合成繊維等の新技術開発に対する繊維工学の応用展開の限界等を学生が認識し、不安感が学生に増大した。このような背景の下に学生は繊維工学のような直接的な目的指向ではなく、将来に向けて応用展開が期待できる技術への関心を深め、材料分野では高分子材料研究への志向を強めた。一方、当時は合成繊維業界で「産学協同」(現在の産学連携) が強く提唱され、学生も大きな関心を持ったものである。

3. 繊維工学科の現実と将来—教官と学生との座談会

上記のように、産業および技術の進化を背景に繊維工学科では有志学生と教官との意見交換会を開催し、繊維工学と産業ニーズとの関係、カリキュラム等が議論されました。学生は産業技術が要求するニーズとカリキュラムとのギャップを感じたものです。当然、先生方は勿論のことだったと思います。この座談会では、基礎教育、専門教育のあり方、「繊維工学」を「化学」、「材料学」、「機械工学」等々による代替の可否、さらに踏み込んで、繊維工学科のカリキュラムへの対応、繊維工学科の将来の姿等を議論したものです。議論の中心は「材料学」、「機械工学」のいずれの方向にするか、両方を併せもつ領域にするか、であったと思います。(その後、「材料系」と「機械工学系」に分離) これらの議論において、学生は基礎的専門の充実、繊維のみならず、高分子物質を対象にした学問へのシフトを意識し、繊維技術をより方法的な学術研究を主体にした基礎力、応用力の増強を求めたものでありました。【繊維工学会誌 No.3 「繊維工学への希望」】

半世紀前、このような問題に先生方もご腐心されたであろうと思います。我々、子供である学生相手の議論に対応いただいたことを感謝と度量を感じるものです。

半世紀を経た今にして思え

二、曲り角の繊維工学科
他 大 学 と の 比 較

・本学繊維学部もいよいよ三十七年度から工学部となり飛躍的發展が期待されている。この際わが繊維工学科もその意図にそぐべく、工学部の一学科としてはすかしくない、より充実した繊維工学科への脱皮をはからねばならない。学に於ける学科の性格を形成する要因は、主としてその学科に於て如何なる問が対象とされているかということにあると思われる。特に理工科系大学に

ば、当時の繊維工学の学術上のレベルは如何かと思われる部分がありました。一方、繊維工学科は、企業での学外実習(今で云うインターンシップ)は大いに歓迎され、それなりに社会・企業から一目置かれ、特色がありました。

現在、大学の数はその昔擲擻された「駅弁大学」の比ではなく、大学はさらに庶民化し、少子化、グローバル化(大学の開国)等を背景に大学改革が組上りにあります。このような環境下において、学生や庶民の目線(経済誌、週刊誌等を含む)では影が薄いと見られている農工大がいかなる特徴(学術レベル、学術分野等)を持って、数多い大学の中で独自性を発揮できるか、その動向は前記のような経験を経たOBにとっては大いに気になるところであります。農工大の発展を願いながら、大学とは何かと思う今日この頃であります。以上

繊維工学への希望

藤本 修身

先達の英智中、工業でこんなことをしたいとある。今まで綿紡がとてまた生機躍るにける機織業の地位を思ひとき、直感的には綿紡の新機織場が、今後今までの機織業のより立場に進まされるのではないかと、と懸念されたのである。このことは、今後合成繊維が、その主産品として全盛を遂げるに必

これは繊維工業にタッチしよりとする者に、思ひ、考へてみなければならぬ問題が提示されて居る。今後は繊維工業のあり方をよく見詰つたに新しい方向を見出すべく努力すべきである。では、現在の日本経済の中において繊維工業は、その地位をもち、将来如何なる姿を呈するものか、は大いに關心をもつところであるが、勿論専門はわからないしその力も乏しい。たゞ私に於て可成り、現存日本産物の取らるべき方向と、世界的に

4. 母校への思い～間違われ続けた人生～

藤本 修身 (農化院 S46)

私は70歳、広島県に生まれ育ち、間もなくこの地に骨を埋める年齢になりました。この間私は、出身大学を間違われ続けてきました。

東京五輪の前年、農学部に入りましたが、田舎の知人との会話は「どこの大学?」「東京農工大学よ!」「あ～柏戸の卒業した大学か!」……この頃、東京農業大学出身の富樫は、横綱柏戸として活躍しました。卒業後、地元に戻って就職すると先輩から「どこの大学な～?」「東京農工大学です!」「はいじゃ、大根踊りが踊れんか?」……大根踊りは東京農業大学を象徴するパフォーマンスでした。当初、私は農工大の卒業生だと説明していましたが、やがて丁寧に説明しても無駄だとあきらめ、広島では農工大はあり得ない大学、いつの間にか同窓会支部総会に



柏戸の土俵入り(ネットから)

出席する日だけ「農工大卒業生」になっていました。

さて今から4～5年前、農学部遠藤章先生の業績が、日経新聞に紙面の半分以上を費やし特集記事で紹介されました。さらに2年前には産経新聞電子版で母校が、東大などメガ大学を押しつけて特許収入日本一の大学になっていました。たぶん工学部を中心に業績が実用化されるなど、母校の活躍が目立つようになり、「農工大卒業生」として胸を張れる時期が来るのではないかと期待しているところです。

振り返って私たちの県支部総会の活気はどうか……総会は、本部派遣職員から報告を受けたあと懇親会に流れるパターンの繰り返しでした。出席者はいつもの顔ぶれに加え、派遣職員とつながりの濃い方が出席されるという傾向の繰り返しでした。こうしたなか支部の一員から、同窓会に出たら何かを得て帰りたいという意見が出てきたのです。4年前のことで私が支部長を引き受けた時でした。

実は、本部派遣職員の報告は、「箱モノができた」「学部が改変された」など、『農工通信』を見れば分かることばかりです。もっと違う角度の情報こそ新鮮であると同時に、新鮮な情報こそ胸の張れる母校へ発展の動力になるのではないかと考えてなりません。

例えば、昨年の派遣職員が報告に付け足された「生物模倣」の話は、もう少し熱がこもれば大きな話題になったと思うほどでした。研究事項は、学術的に披露されるところについていけませんが、話題として提供されるだけなら報告事項の一つに加えていただいているのではないかと、またトピックとして遠藤先生の業績内容や評価の実情、特許収入の裏事情など新聞にない情報は、ある意味で私たちがワクワクさせてくれるのではないかと思います。

東京に転がっている話題は、本部の方には日常かもしれないませんが、私たちには新鮮、地方には母校の情報はほとんどありませんから。もちろん本部から地方に派遣される方には地方を楽しんでもらわなければいけないので、派遣職員の苦にならない程度に、従来の箱モノ話題から脱却した情報提供をお願いしたいと思います。(広島県支部長)

5. 東京農工大学と宇都宮大学（東京と地方）

齋藤 高弘（連農生 H4）

日頃大変お世話になります。昭和60年に農学部農業工学科を卒業しました齋藤と申します。現在は、宇都

宮大学農学部で教員をしております。ご存知のように、18歳人口が減る中、大学は生き残りに必死な状況が続いています。そんな折、皆さんは東京農工大学の現在の入試偏差値をご覧になられた事があるでしょうか？何と何と、河合塾の2014年入試偏差値では、北海道大学・九州大学・東北大学を抜き、もはや東大と京大の次にランクされる大学となっています。皆さんが、入学されたころ東京農工大学の偏差値はいくつであったでしょうか？なぜ、このような快進撃が続いているのでしょうか？答えは、まさに東京と地方の差といっても過言ではありません。東京に金が集まり、物が集まり、人が集まり、田舎は金が回らず、物は流れず、人は動かさず高齢化……、苦戦が続いています。

読者の皆さんはここ栃木で生まれ、大学で東京へ向かい、就職で栃木に戻られた方も多いのではないのでしょうか？農工大の学生時代、クラスメイトにはいろいろな地方からの多様な学生があふれていたのではないのでしょうか。しかし、現在、農工大は東京を中心とした首都圏の出身者の割合が増えていると聞きます。この傾向は我が宇都宮大学でも同様で栃木県を中心とした近隣出身者の割合が増えています。これは、もちろん偏差値の上昇に伴い、首都圏の中高一貫で鍛えあげられた（訓練された）学生しか、農工大に合格しにくくなったこともあげられますが、一方で保護者の考え方が大きく影響をしています。今の受験生を持つ保護者の多くは、過去に大学受験戦争を経験した偏差値世代でもあります。自分たちの学生時代は、自由に青春を謳歌し、就職や将来の事にはある意味無頓着でしたし、親離れ・子離れが成された4年間でした。しかし、時代の不確実さかもしれませんが、今の親は可愛い子には旅をさせません。賢い(?)親は費用対効果を計算します。親元を離れ、仕送りをし、それに見合う就職が得られるのだろうか？浪人してまで第一志望大学に行く必要は無いのでは？それよりも、3平（平穏な生活・平均的年収・平凡な外見）を求め、3高（高学歴・高収入・高身長）などは死語になりつつあります。よって、東京は東京の中で、地方は地方の中で多様な価値観に触れることの無い、小さな循環が繰り返されます。その結果、必然的に視野が狭くなり、閉塞的な状況に陥り、金・物・人に勝る都会と地方の格差は広がるばかりになります。

このような中、偏差値では農工大に大きく水をあけられた宇都宮大学に勝ち目はあるのでしょうか？受験生が大学選択をする際に、模試の判定結果や高校での進路指導の資料、オープンキャンパスなどを参考にす

るのはもとより、母親の意見(45%)、父親の意見(36%)を参考にする割合も高い実態があります。また、子供の進路選択に関して、6割の保護者の方が「親自ら学校の情報を集めている」と答えています。大学選択は大変重要な親子の共同作業になっています。このような環境の中、昔のように大学が偏差値で輪切りになる時代は終焉し、少人数教育により面倒見がよく、トラブルに巻き込まれる可能性が低く、費用対効果が高く、就職実績が豊富で、安心して預けれる地方国立大学には大きなチャンスがあると言われていています。就職では東京農工大農学部より宇都宮大学農学部の方が圧倒的に優れています(と私は思います)。

大学は変わりました。皆さんが学生であったころの教授陣とは違います。宜しければ、一度我が、宇都宮大学農学部農業環境工学科のHP(<http://env.mine.utsunomiya-u.ac.jp/>)内の「保護者の皆様との連携」というページをご覧ください。我々の熱き思いが書かれています。可愛い子には旅をさせてみたいが……とお悩みになられている受験生を持つ保護者の皆様。是非、是非ご覧あれ。

I-2 誇りに思う農工大

1. 遙かなる砂川事件

高柳 昭吾 (織化 S35)

今から3年前の冬の日である、朝日新聞の朝刊の一面下段の本の広告欄に砂川事件で逮捕された武藤軍一郎さんの著書の広告が載っていた。私より一年先輩の農学部の学生であったが、いかにも農学徒らしい風貌が好きであった。直接、会って話したことはないが、「軍チャン」といって皆に慕われている事を知っていた。

『砂川事件の記』ある農学徒の青春』というタイトルである。さっそく購入して読んでみると懐かしさがこみあげて来た。九州大学の名誉教授だという当時、農業経済の権威者であった大谷先生をはじめとして、農学部の人達が彼の心の支えになったことを再認識した。農工大学農学部の奥行を感じた。

60年前のことである。私は農工大学の小金井キャンパスにあった西ヶ原寮に住んでいた。当時の国立大学は一期校、二期校に分類されて、入学試験が2回受けられるようになっていた。一期校は東大をはじめとして旧制帝大や東工大、一橋大のように旧制大学が主

流であり、二期校は旧高专など新制大学がほとんどであった。東大法学部に入りたくて東大文科一類を受験したが、浪人しても入れなくて、寮があり、全員が入寮出来るということを知り、「蛭雪時代」で知り、貧に生まれ、乏に育った環境だったので、これだけの理由で繊維化学科に入り、西ヶ原寮に住むことになった。

これは実に楽しい生活であった。この中で、一年先輩の吉田泰三さんという自治会の役員をしていた好人物と知り合って、夜中まで議論したり、碁を打ったりした。昭和32年9月22日のことであるが、彼が砂川事件で逮捕された。

私はこの善人の吉田泰三さんに誘われて、一度だけ砂川に行ったことがある。当時の私はノンポリで、学生運動には興味がなかったが、吉田泰三さんに一度ぐらいは義理をはたした方が良いと考えてデモに参加した。

このデモに先だった集合で、当時、全学連の委員長をしていた香山健一が「今日は地元の農工大が先頭に立ってもらうので、頑張ってもらいたい」旨のアジ演説をした。これで農工大がデモの先頭を切ることを知った。先頭にいた農工大学生が写真にとられ、基地内に押し出されて、3人もの逮捕者を出したのだと60年近く経った今でも考えている。

この香山健一という男であるが、直接会ったことはないが、一度、オルグに来たことがあった。私が社会に出て何年か経った後に、学習院大学の教授で右派の論客として論壇で活躍するのを眼にするようになった。砂川事件当時は東大生として、いかにも脳が良さそうで颯爽としていた。私なんか詰襟の学生服なのに、彼はダブルのスーツを着て、それは見事な振る舞いであった。それが後年、右派の論客として眼につくようになったわけである。

それ以来、私はこの手の男をてんから信用することなく現在に至っている。その後の吉田泰三さんは風の便りだが、倅せな人生を歩んだということだ。

2. 思い出すのは農場のある大学

藤本 和弘 (林 S50)

大学入学の頃、「この大学は公務員養成大学だよ」と誰かに言われた。その後、他大学院へ進学し公務員になって、2013年3月末に退職した今、その言葉を誇りに思い、後輩にも是非それぞれの分野の公務員の道を歩んでほしいと思う昨今である。農工大学は、公務員としてしっかりと社会貢献できる勉学環境と研究環

境が整っている。農場のある自然豊かな心落ち着く学内環境はそれに相応しく素晴らしい。

私は林学科卒業であるが、歩んだ公務の道は、大学で森林環境を学んだことが基盤にある。環境豊かな農学部で森林について学び、さらに、環境全般から環境づくり、空間づくり、都市づくり、地域づくりへと学ぶ関心が広がり、結局、公務の世界ではまちづくり・地域づくりに公務生活の大半を注いだ。本望な業務と生活を送ることができた農工大学時代に感謝している。是非、後輩諸氏にもこんな先輩がいたことを理解し公務の道を目指していただき、「今も公務員養成大学だよ」と言われるような国家や地域のためになる人材を輩出できる大学として存在感を一層高めてほしい。

現在は、第2の職業に携わっているが、どうしても人生の先輩風を吹かせたいと思うようになってしまった。機会あるごとに自らの人生哲学を語りたくなる。そこで、幾つか悟ってきた人生哲学の中で若い人達にも参考になると思われるものを紹介しよう。

まず、「人生は存在証明」である。生きることは存在証明を残すことである。それには、生物的存在証明、社会的存在証明、科学技術的存在証明の3つがある。生物的存在証明は、結婚し子孫繁栄させることである。社会的存在証明は、職業・職務・業務で成果を残し名を残すことである。科学技術的存在証明は、自らのオリジナリティを発信し残していくことである。例えば、自分ならではの理論、著書、作品、製品を残す等々「もの」を残していくことである。

次に、「三位一体生活の実践」である。この場合、三位とは、職業・業務遂行の徹底、自己実現の徹底、ストレス解消の徹底の三生活の実践である。業務に身を投じ業務を推進して業務上で名を残すこと、自己実現目標を立てその実現にも邁進すること、その双方を追究していくにはストレスが避けられないから常日頃からその解消にも取り組むこと、がこの生活の実践である。

さらに、「読み・書き・話し・聞く・見る」ことの実践である。これは業務上も自己実現上も必要な生活態度でありスキルである。特に若いうちはこの技術を磨かなければならない。知識を身に着け、それを文章や言葉で生かし、他の知識や情報を耳と目で習得することが仕事でも人生でも肝要なことである。

この3つの悟りにそって、これまでもそして残されたこれからも楽しく暮らしていこうと思ひ、思う存分に生き抜いている昨今の私である。皆さんもお元気に思い通りにお暮しくください。

3. 農工大で見つけた私の座右の銘

中野 伸一（環保 H1）



私は、平成元年に当時の環境保護学科を卒業しました。この年は、昭和天皇がご崩御され、このニュースを横目で見ながら卒論を執筆していたことを、今でも鮮明に覚えています。

私は、農工大の最初の2年半は、柔道部に所属しておりました。私と同級生の部員には、当時の主将であった田中知己君がおり、彼は農工大の教員として今でも母校に貢献されています。私は、最初の2年半はロクに勉強をせず、正直に言って良い学生ではありませんでした。当時を思い出すと、晴見キャンパスと府中・国分寺の町がよく私を育ててくれたものと、感謝してもし切れません。

そんな私が自分の生活を大きく変えたのは、3年後期から研究室に所属してからでした。私が所属したのは、生物汚染化学研究室で、倉石衍教授、瀬戸昌之助教授、片山葉子助手、山田元章技官がおられ、私は瀬戸先生にご指導いただきました。当時は、環境汚染物質分解能力を高めた遺伝子組み換え細菌を野外に放出すれば、それらの物質の分解が促進され、環境汚染の問題は解決すると考えていた研究者もおられた時代でした。しかし、米国の研究者が、ある論文で遺伝子組み換え細菌が野外で受ける様々な環境要因を列記して議論しており、私はこの議論に強く印象付けられました。そして、「細菌などの微生物を使って環境問題を解決するためには、それぞれの微生物の基礎的な生態を解明しなければならない」と考え、瀬戸先生に相談して、京都大学・大津臨湖実験所（以下、大津臨湖）の手塚泰彦先生の研究室に大学院進学することにしました。大津臨湖に見学に行った際、私は、初めてお会いさせていただき手塚先生に対して、自分がなぜ大津臨湖に進学したいかの理由について、上記「細菌などの微生物を使って環境問題を解決するためには、,,,,」を申し上げました。手塚先生は、このことを良くご理解くださり、京都大学理学研究科の大学院入試に合格した私を大津臨湖のメンバーとして迎えてくださりました。

その後、私は、滋賀県琵琶湖研究所、愛媛大学と渡り歩き、現在は京大大学生態学研究センターのセンター長をしています。運が悪いことに、京都大学で

は平成25年度から大学改革の嵐が吹きまくるようになり、部局の再編、定員・経費削減、教員給与システムの改革と、次から次へと従来の大学教員の研究生生活を脅かす改革が次々と実行されつつあります。国立大学が独立行政法人化して以来、大学教員に求められる仕事が多様化してきておりますが、私は、現在の私に課せられた仕事によって新たな別のステージを創るべく、ポジティブに毎日を過ごそうと心がけています。でも、今でも私の心にあるのは、私が農工大の卒論時代に思った考え「細菌などの微生物を使って環境問題を解決するためには、,,,,」です。これが、私の研究者としての座右の銘と言えるかもしれません。

最後に、母校・東京農工大の益々の発展を祈って止みません。(京都大学生態学研究センター)

4. 高専から農工大に編入学して、いまある自分

谷口 浩成 (工博電 H15)

私は岡山県にある津山高専から、編入学で東京農工大学工学部電気電子工学科の3年次へ入学した。農工大は、高専からの編入学生を他大学に比べ、多く受け入れている大学だと思う。平成27年度の募集要項を見ると、工学部全体で70名、電気電子工学科では20名を募集している。これは、私が編入学したときよりも多い募集人数だと思う。募集人数が増えていることは、農工大が高専学生に価値をおき、農工大での活躍を期待している表れだと、勝手に解釈している。

高専からの大学編入学は、各大学によって試験日程が異なるため、複数の大学を受験することができる。私は、3つの地方国立大学と農工大の計4つの大学を受験した。農工大は4番目の受験で、私の本命大学であった。従って、3つの地方国立大学は保険のためであったのだが、実際はすべてで不合格となり、私にとって農工大が最後の頼みの綱となった。後がないだけに、できる限りの準備をして臨んだ。その甲斐もあり、何とか合格することができた。合格した学生の中では、認められた単位数が最も少なかったことから、辛うじて合格できたのだろうと思う。

編入学し、結局、博士の学位を取得するまで、計7年間を農工大で過ごした。その間に様々なことがあったが、最も忘れられないことがある。博士課程2年の時、退学しようと決意したことがあった。学業も研究も疎か



2013年度研究室の集合写真 (前列中央が谷口)

にし、研究室にはほとんど顔を出さず、指導教員の教授や研究室の学生らにも迷惑をかけ、こんな状態なら退学すべきだと考えた。教授に胸の内を話すと、教授はこれまでのことを咎めるでもなく、これから何をすればいいのか、どうすればよいのか、未熟な私に優しく道筋を示してくださった。見捨てることなく、励ましてくださった。あの時の言葉がなければ、今の私は存在しない。

大学院を卒業したのち、少し社会人の経験を経て、私は今、母校の津山高専で教員をしている。今年で7年目となる。クラス担任として、研究室の指導教員として、部活動の顧問として、学生と向き合っている。教授がしてくれたように、私も学生と接していきたい。見捨てることなく、最後まで励まし、支えてあげられる教員でありたいと思う。

5. 工学部生命工学科の風景

佐々木伸大 (工博生 H17)

入学したのは1995年、受験したはずの学科名が変更され、生命工学となったその年であった。

学科名に「生命工学」という名称を冠したのは日本国内では初の学科ではなかったと記憶している。1995年といえば、その後、農工大生を含めて熱狂的な支持を受けたアニメ“エヴァンゲリオン”の放送が開始された年でもあり、“セントラル・ドグマ”なる言葉が一人歩きを始めた頃で、まあ、いずれにせよ“バイオテクノロジー”という分野が大きな期待を背負って世に出てきた頃であったように思う。学部生時代の生活は既に忘却の彼方であるが、もともとは材料化学を目指して入学したものの、講義はその名前に全て“生物”がつくものばかりで、生物有機化学”だの“分子生物学”だの、はては“生物物理化学”なんて、ただ学問の名前を並べただけではないか。などと思ったものである。しかし、門前の小僧でもないが、“生物”の講義を聴いているうちに生物とは

なんと素晴らしく美しいシステムなのか、という思いに囚われるようになった。4年の研究室配属でなんとなく植物に惹かれて植物色素を研究している研究室に配属になった。ゼロ年代になる頃、流れに身を任せて大学院へ進学したのだが、毒にも薬にもならない植物色素の研究では苦い思いをした。もちろんいい思い出、である。

生命工学科に在籍して印象に残っていることは、卒業論文や修士論文の発表会のことである。生命工学科の学生の発表会は全て発表時間よりも質疑応答の時間が長いのである。5分発表なら7分の質疑、10分の発表なら15分の質疑、といった具合である。質疑の時間が2、

3分なら一つの質問に答えているうちに何とかやり過ぎせそうなものだが、15分なんてことになるとうそは行かない。1、2週間の発表練習などでは対策のしようもないのである。しまいには、先生方も聞くことがなくなって、つい、素朴な疑問を口にしたりし始める。うまいこと乗ってきてくれたなとも思うのだが、この素朴な疑問というもののほど厄介なものはない。普段、考えることをしていなかったことが露呈するのだ。1年間あるいは2年間たゆまぬ努力を続けなければならないのだから、学生にとってはたまったものではない。それでも、このような発表会がきっと就職活動にも活かされるだろうと思った

海外ねつとわ〜く 1

卒業50周年を迎え、その一昔を思う また、日本の私達への多くの貢献は忘れられない

鐘 維源 (工化 S39/台湾)

この春、農工通信寄稿の件で50年ぶりに母校工學部を訪れました。全キャンパス至るところ桜が満開でした、同行の妻と一緒に楽しく観賞できました。あいにく修學旅行のシーズンでしたので、ホテルは至るところ満員でした、やむを得ず数日間地方へ転々移動し予定の仕事をなんとかかたづけましたが、はじめての苦い経験でした。

本文に入る前に下手な文章を農工通信に批露するのは厚かましい思いですが、この面をかりまして、ここ百年來日本が台湾に貢献下さったこと、私個人が蒙りました恩恵等今でも心深く銘記し厚く御礼を申し上げる次第です。また恩返しをすること常に心掛けてきました。

昭和20年終戦後、不幸にして台湾は日本から離れ共に苦境に落ちこみ数年後日本は一早く復興しましたが、台湾は國情が変り60数年後の今でも文化、文明、生活面は未だ日本に及ばず技術面では親日企業が日本との技術提携、交流を進め、經濟發展の原動力となりました。

終戦から約2年の間に約2百万人が本土に引揚げました。荷物の運搬で大変でした、また長年台湾に居住して日本では家も無く大部困苦の生活でした。私の小學校4、5、6年級を担当した台湾生れで30の歳に日本に引き揚げた恩師は日本には家無く大変苦勞したようでした。

数年間台湾で先生の行方を打診、來日後やっと福知山を訪ね、15年ぶりにお会いできましたがまったく前の面影無く半身不隨でギッチョで、白墨をとり小學校の教師をしていました。引き揚げ前までは体格は良く、住んでいた田舎町の美男子でした。

このように過去50年、この200万人以上の方々皆苦心慘憺して不毛の地を黄金地に、さうして世界で日本に次ぐ文明國を築き上げました。このように台湾に対する偉大な貢献は今の皆さんには殆んどわかっていないようです。

小學校時代毎朝、修身の課程で教わった日本の精神も現今では聞かず、かえって台湾の親日派に残っているようです。皆さんの力で先輩が残した教訓を喚起しては？

戦前は台湾に対する貢献、そうして戦後は私が日本で個人的に大學の水谷久一教授、その他諸先生、先輩、友人から受けました恩恵もこれまた非常に多く、お蔭様でなんとか成果

を得ることができ、帰國後も産學方面で活用、今に至り毎日の仕事で習得したことにつながっています。

私が水谷久一教授の高分子化學の課程を専攻したいきさつ、在日中學生生活の試練、帰國してからの社会に対する義務、多くの經由につきまして、次回に紹介させてもらえば幸いです。数頁の原稿となります。尚、最初の3年東京にての學習、生活は順調、後半の大阪にては、生活、學習ではじめからつまづき、結局、東京で成果を得ましたが大阪で落ちぶれ、これを大阪商人の常用語「儲うかりまっか?」で例えて言えば、東京では儲うかりましたが、大阪では儲うかりませんでした。

終戦以來続いた經濟不振に伴っての獨裁政權下では學術、技術、經濟、生活面等…希望が無い、若物達はこれを痛感し、外国留學のブームとなり、そこで日本留學を日差しました。勿論これを達成するにはいろいろな困難がある。当時同僚から何處へ行っても青山あり、日本に着いて間もなく大手ゴム会社の次長から、お前は日本へ冒険に來たと皮肉な言葉を聞かされた。

パスポートの期限が切れる数週間前にやっと渡航を決断、台湾の3千トン級のバナナボートで基隆港から3泊4日船よいもしないで神戸港に着き出港前に買った2籠のバナナを甲板で待っていた青物屋さんへ渡し船賃となりました。数日間神戸に宿りこれからの道程を思考、地図をたどって東京に向い、先づは高分子化學で有名な大先生水谷久一教授にお目にかかり、早速、研究室で學力檢定の結果、新學期から工業化學科の第3學年編入を許可してくれました。好運でした。台湾で(6.3.3.2)14年教育を受けましたので。

(注) 原文のまま(旧漢字、旧仮名づかいがあり/編集委員)



りもするのだが、卒論発表会は就活が終わったのは後なのでした。就活がもっと後ならきっともっといいところに決まるだろうな、なんて就活もまともにしたことがなくせに思ってみたりするのである。いずれにせよ、このようなシステムによってこれまでも（きっと）そしてこれからも（きっと）生命工学科から優秀な人材が輩出されることを願ってやまないのである。

I-3 忘れ得ぬ仕事

1. 75年が過ぎて

小泉 昌之（織工 S38）

1世紀の4分の3を過ごしてきました。第二次大戦で東京の大空襲を経験し、両親の故郷に疎開し、そこで、日本の敗戦を知らされ、荒れ果てた東京に戻り、それから、雪の中、裸足で下駄を履き登校するような耐乏生活を経験し、中学、高校、予備校、大学とそれなりにマイペースで過ごし、社会人となり、世界中を飛び回り、後は、静かにお迎えを待つ、歳となりました。学生生活、社会人としての思い出は幾つかありますが、やはり、武蔵野の桑畑に囲まれた大学時代の生活が懐かしく思い浮かびます。野球部に席を置き、楽しいだけの野球を4年間、存分に楽しみ、3大学対抗では、京都から怪我のため担がれて、帰ってきたこと、夜汽車で信州に行ったときには、運動部会の会長の役得で車掌に、ファーストクラスの席でゆっくり休ませもらったこと。運動部会の主催のダンスパーティーを催し、プロのバンドと慶応大学のバンドを呼び、パーティー券を捌くために、女子大を回ったことなど、懐かしいこととして、思い浮かびます。

確かに、社会人になってからの経験はもっとスケールが大きく刺激的な思い出が多く、韓国で教育勅語を諷んじる人とネゴをしたり、街で金を取られそうになったり、台湾では、現地人（内省人）と外省人との対立する現場に立ち会ったり、中国では日本のT社が数億のペナルティを取られる裏話を聞かされたり、プラントのネゴ中、同じ日本のプラントメーカーの裏話（日本との電話での打ち合わせ）の内容を傍受していることを聞かされたり、床に穴のあいたタクシーで、雪の中、大連から北京まで寒さに震えながら帰ってきたこととか、色々な経験をさせていただきました。

学生時代の思い出は、小さなものでも心に残り、その当時の友達に会うことは単純に楽しく、社会人になっ

てからのそれは、何時までも絆をつけた付き合いに、感じます。

後、どの位時間があるのか、解りませんが、今はただ、波の無い生活、後を、濁すことなく、静かにこの世を去りたいと思っております

2. 大学入学から半世紀を顧みて

鈴木 勝美（織化 S38）

私は昭和34年に繊維学部繊維化学科に入学し、38年授与された卒業証書は工学部繊維工業化学科卒業とある。この時分日本は高度成長期で39年の東京オリンピック開催に向け好景が続いていた。東海道新幹線、首都高速道路建設等公共投資があり10月10日オリンピック開催に至る。

話を戻すが、農工大学も35年繊維化学科が工業化学科になり、38年に機械工学の新校舎が完成し、第一回の卒業生が巣立った年でもあった。在学中4年間は西ヶ原寮にお世話になり、安保闘争の激しかった時には集会があれば毎夜中央線で参加したものである。3年生の夏には今でいうインターンシップで帝人岩国工場にお世話になった。実習テーマはレーヨンの白色度と晒条件の関係であったと記憶している。実習中休日は実習生仲間と秋吉台、巖島、そして大島では職場の人達と海水浴を楽しんだ。帰途、松山工場のトリアセテートの真新しい工場も見学させて頂き大変好待遇であったと感謝した次第である。また、帰りに在学中お世話になった2年先輩の千葉さんが東邦レーヨン徳島工場に勤務していたので無理をお願いして寮に一泊、夜の徳島を案内して頂いた。

千葉さんには家庭教師のお世話も頂き3人兄弟の長男を引き継ぎ、次男は同期の杉浦君に引き継いだ。千葉さん、杉浦君を含め兄弟3人とは今でもお付き合いしている。杉浦君は40数年色材及び周辺材料、技術に関して研究を続け、英国UOBで「超微量での色材同定」でPhD取得、IDWの組織委員長も務めあげた。なお、何度もUOBの同窓会副会長就任の要請を受けているが同窓会といっても大学経営そのものであるという。体調を整えて受諾するよう望む。

私は卒業後、日東紡に入社し、福島県郡山市にある富久山工場の化繊（スフ綿）課に配属になった。富久山には堀尾さん、稲垣さんと先輩がおりお二人のお蔭で私はスフ綿に長く携わることができた。しかし、60年プラザ合意による円高で当時9社あったスフ綿も30%強が輸出で

あり、当社は61年撤収した。スフ綿はその後年を追って、止める会社が続き、現在2社だけが製造を続けている。

私は58年から建材部門も担当していたので、平成3年には鈴鹿工場に初めて転勤し、メラミン化粧板の製造に当たった。今でもお付き合いしている友人ができた。平成7年に郡山に戻り第二工場の跡地にショッピングモールを建設するに当たり、商工会議所では当時副会頭をしていた故柳沼恒五郎先輩にそして日東紡を退職後務めた会社では県庁の土木部長をしていた雨宮さんに大変お世話になった。他にもお世話になった方は多く居られるが字数の関係で記載できずお詫び申し上げます。このように皆さんの周りにも活躍する同窓生は多いと思います。私は農工大学で学んでよかったと思っています。

3. 仕事と人生をつなぐ研究室の絆とエコロジー

細村 弘義 (林産 S45)

受験最後の農学部の合格発表は、緑濃い構内の静けさだけが記憶に残ります。親に負担をかけ私大の学生証をもらったばかりでした。そんな時、テレビで「その私大にも合格したが、農工大を選び少人数で先生との距離が近くて大変良かった」と知らない先輩が話すのを見て道を決めました。

まさに高度成長期に入学し、学園紛争の頃、林産化学研究室に進んでから農工大の良さを実感することになります。研究室での同級生は鈴木くんだけでした。彼は消極的だった私を他学科との交流等に誘い出してくれました。彼が森林総研の退官を目前にして急逝したのは残念です。卒論は石津先生の指導を受け、実験の手順は佐渡先生と、先輩の上床さん、多田さんにも教えて頂きました。そして教授の高島先生には卒業後もプライベートなことで大変お世話になりました。

就職では希望の製紙会社に行くことができませんでした。これで現実に向き合うことができたと思います。目的は経済的安定を得ること、中小企業でも成長分野で将来性があれば良いと決め、あまり知られていないコンピュータ・プリンタ用紙を製造する印刷会社に入りました。私はいろいろな事が重なって行き詰まり3年半で退職しましたが、この会社は従業員数が当時の10倍以上の大企業になりました。

約3か月迷い、新聞広告で見つけた急成長中の複写機会社に中途入社しました。そしてコピー用紙からス

タートして複写機・プリンタや画像形成材料の研究開発に30年間携わりました。担当した用紙技術チームでは後輩6人に、後輩で静岡大学人間環境科学科教授の鈴木さんの教え子も加わり成果を上げてくれました。製紙会社から移られて研究室を引き継がれた大江教授と、後輩で現在は再生資源科学研究室教授の岡山さんには中性紙と再生紙の開発を指導して頂きました。東大教授になられた石津先生にも時々お会いし、製紙会社に勤務された上床さんとは仕事で一緒にできました。

しかし、この会社でのキャリアは若手登用の理由でポストを外され暗転しました。約10か月休職し、転職支援会社を通じて総合商社に三度目の転職先を見つけ、ナノテク材料の新規事業化等に取り組みました。この経験が視野を大きく広げることになります。退職した後も担当案件の一つであった自然冷媒による冷凍空調のフロン問題解決を目指して研究を続け、最近、NPOを立ち上げて活動を続けています。

振り返ると、私は前職の知識・経験を踏み台にして、成長分野にやりたい仕事を求めて転職しました。その中で変わらないのは、有機化学の水谷先生が薦めてくれたレイチェル・カーソンの「沈黙の春」と、宮脇先生の植物生態学の講義に触発された環境とエコロジーへの関心であり、再生紙やフロン等の環境関連テーマに取り組む動機になっています。そして先生、先輩、後輩、同級生を始め多くの方々にお世話になったことを思うと農工大が人生の扉だったと気づくこの頃です。(群馬県支部)

4. 雪上のカーチェイス

飛澤 美雄 (機械 S48)

漆黒の闇の中、私の眼は前に行く赤いテールランプにくぎ付けになっていた。ヘッドライトに照らされた真っ白な雪の上を、時速100kmをはるかに超えるスピードでその車は突き進んでいる。私も遅れまいと必死で後を追う。

一段と明るくブレーキランプが輝き、前方との距離がみるみる縮まる。カーブだ。私も慎重にスピードを落とすが、それでも雪の上では限界に近いスピードだ。車はずりずりと横滑りし外側のガードレールがじわじわ迫ってくる。ここで怖くなってアクセルを急に戻せば車はたちまちスピンしてしまう。じっと我慢しながらアクセルを踏み続けるとようやくカーブを抜けるが、ほっとする間もなく再び前に行く車は猛烈に加速し始めた。

1980年代の後半、私は厳寒のスエーデンアルジェプロ

グに滞在していた。首都ストックホルムのはるか北、北極圏間近にあるこの小さな町で乗車用ABS＝アンチスキッドブレーキシステムの開発を行うためである。

車輪のロックを防ぎ安全に停止するためのABSの開発には、雪や氷の滑りやすい路面でのテストが不可欠である。私たちは湖に分厚く張った氷の上に作られた広大なスケートリンクのような氷や雪の路面で車を走らせ、テストを繰り返していた。

時にマイナス40℃を下回るこの厳寒の地は、見るものがすべてが珍しく驚きの連続だった。全く無風の朝には、肉眼ではっきり見えるほど大きな雪印マークそのものの結晶が地面に無数に散らばっていたし、全体が青氷に覆われた山が短い昼の太陽に照らされてキラキラ輝く様は神々しいとさえ感じた。放牧されているトナカイの群れや、馬のように巨大な野生の鹿に遭遇したこともあった。

さて、冒頭の話に戻そう。その日私たちは、立ち合いに滞在していた日本の客先を200kmほど離れた空港まで送り、3台の車で基地に戻るところだった。先頭は学生時

代にラリーをやっていたというフランス人エンジニア、私を挟んで後ろからベテランドライバー氏がサポートしてくれるという話だった。



「ゆっくり戻ろう。」という言葉とは裏腹に前車はどんどんスピードを上げてゆく。私も遅れまいと必死に追いつがる。サポートしてくれるはずの後の車はとくにバックミラーから消えていた（後日ベテランドライバー氏は、「あんなクレイジーどもにはとても付き合っていない。」と語っていたようだ）。

じっとり両手に汗をにじませた私はようやく基地にたどり着いた。200kmを越える雪道を1時間50分で駆け抜けたのだった。

あれから25年以上経ったが、あのスリリングな体験は今も鮮明に記憶に残っている。

海外ねつとわ〜く 2

TUAT - I miss you 東京農工大 - 偲ばれる

Nguyen Ngoc Quang (環・資院 H22/ベトナム)

【寄稿文の要旨】

伝統と近代化が調和され融合した、世界の知る日本は、国民の誇り、幸福な生活と美しい国土を育てている国である。日本のイメージはベトナム人の心と魂を密接に興奮させている、そして私は就学し、学生であった日本と、日本の大学を常に想起して日々を歩んでいる者である。

Harmonious combination between tradition and modern, the world knows to Japan is a country with national pride, peaceful life and beautiful landscape. So images of Japan was existed closely in heart and mind of Vietnam, and I were a students in university of Japan, always keep memories of Japan, Japanese and university I have been lived and studied there.

Although I had been said “goodbye” Tokyo, Japan and dear university more than three and half years but many memories and nice images still keep in my mind and heart, Japan where is rich in history and traditional culture and mixed with animation and modernization of a developed city. Today’s Tokyo is as modernized city with luxury stores and many skyscrapers and modern traffic system as metro system and Shinkansen, but the dreamlike sceneries and magnificent architectural heritage of old Japan can still be found.

As like other Vietnamese students, study abroad is a dream to learn and more understand new and advanced education foundation of developed country as well as improving and upgrading specialist knowledge, and I was one of these lucky students. Before coming to Japan, I were working for German Technical Cooperation (GIZ) to support Vietnam forestry sector in implementation of project on building capacity for sustainable forest management and biodiversity in two provinces of Vietnam. After one year of working, decision to upgrade and improve the speciality was be established in my mind. And I came to Tokyo, Japan in the autumn of September, 2008 for attending the master course (2008 - 2010). My first destination was a ancient university was built from 1877, name of university is Tokyo University of Agriculture and Technology - NOKODAI -東京農工大学, and Vietnamese students always call with tenderly name is TUAT. More than 130 years, the university still keeps available ancient architectural from the first day of establishment. From the main gate to centre of university is stone road with double row of trees lead to the main building. The main building is heart of university where regular organize important events of university such as entering and graduated ceremony, cultural forum ect... Furthermore, all offices of university also located at here, especial supported student room where allow and provide many information according to

scholarship program, tuition fees and extracurricular activities and other important information from leader of university.

Enter university yard behind the main building, I could still imagine about research buildings, library, canteen, trees in the yard and a pond with golden fishes located front of No.2 building. The building No.2 where international students research and study there, almost laboratories and lectures and seminars which are frequently organize here for both of international students and Japanese students. This building was build with modern architecture and set up class room system in logicity. Especially, each floor has a kitchen room is located at the end of corridor, it is location that all students come from different countries to meet, chat and exchange culture



and life-experiences together in the lunch and dinner.

Until now, I still feel care and share from supervisors and Japanese friend during my lifetime in TUAT and Japan. As different as other Vietnamese students, I could come to and learned the master course in Japan by supporting fervently from father's friend. Anywhere and anytime he regular supported and helped me when I met with serious difficult in the first time of new life in Japan. For my supervisors and other teachers, I received warmly care and support from them, they always ready for supporting and helping any student who met matters inside or outside of university. I still remember that my laboratory frequent organize internal seminar on every Friday, at that time each student has to report on research progress and record all comments and recommendation from supervisor for improving their research. For me, I was a first foreign student in his laboratory, his care intended for me was especial. He supported so much for my research proposal and learn about the Japanese culture and food. However, I could not speak Japanese language well so communication between my supervisor and classmate have a little bit of different but my supervisor created warmly and comfortable environment to exchange experiences and learning together. So I am waiting to opportunity to visit my supervisor, friends and Japan.



Cultural interference from different countries (Japan, Vietnam, Campuchia, Laos, Pakistan, Afghanistan, China, Korean, South Africa...) is marvellous feeling and lesson from sharing and exchanging cultural basis. And I will never forget one of my warmly friend he come from Afghanistan. He was "neighbours" with me in the dormitory, sometime he cook several traditional food of Afghanistan and invited me to join cosy dinner with him. I still remember nice taste of rice and curry which were made base on traditional approach. International friendship created great opportunities to learn and knowledge about society and life come from other countries as well as creating good memories about friends who had been studied and shared with me during lifetime in Japan.



Finally, the image of cherry flower - Sakura always remains in my mind. The cherry blossom has always been the symbol of ephemeral beauty in the Japanese culture, and very often associated with the Bushi and Samurai, among whom it was said that life was short and beautiful. The season of cherry blossom very often start at the end of March and early of April. At that time, the custom of Hanami - flower watching under the fully blossomed cherry trees, observation of cherry blossom occurred only in one week because of cherry flower has short live. It is wonderful time that I and my friends organized cosy party with Vietnamese and Japanese food and drinking Asahi beer under cherry trees - which help me never never forget Japan.

With the education I studied and received, I easily used the knowledge learned to find a new job with the right expertise. Currently, I am working in technical cum program officer for forestry programs of GIZ, to implement sustainable forest management for natural forest management according to international FSC standards. With the knowledge and experience learned, I was successful in applying the operations that work on the current project. With your contribution, our project has been successful in supporting two forestry companies achieve FSC certification for sustainable forest management of natural forests in Vietnam first.

In just two short years, Japan and TUAT has become a part of my life, and I am waiting for a opportunity to come back Japan for studying PhD program and visit my dear university again in near future.

II. 同窓の輪を結ぶ

1. クラス会

西田 晴二 (獣医 S41)

久しぶりに、昭和41年度獣医学科卒のクラス会が新橋の居酒屋で、平成25年7月22日開催され、出席させて頂いた。

初めて参加された仙台市からの佐藤さん、米国からは李さん、愛知県からは冨田さん、48年前に比べると、髪が少し変わったかに見えるが、学生時代と少しも変わらない姿を見て、直ぐにお名前と顔が一致し安心した。栃木県からは那須で、今も診療を続けているお髭が立派な矢崎さん、同窓会栃木支部事務局をしている牧さん。茨城県からは魚釣りが得意で、今はキノコについても博学な平岡さん。千葉県からは米国生活が長い堀越さん、原子力安全技術センターで活躍された上島さん、昭和41年度卒獣医学科役員をしている伊藤さん、神奈川県からは熊谷さん、長崎県からは衛藤さん、お二人は地方公務員をなされていたので、何かの折りにお会いしていたが、再会出来て安心した。32名のクラスの中には、医学の道を志しながら捨てきれず卒業後、再度、挑戦し医者になった3名の中から相原さんが参加してくれた。クラス会をする度、何時も快く幹事を引き受けていただく柳田さん、JRAで活躍された小池さん有難うございました。今回は15名が一堂に会した。

幹事さんの挨拶が終わり、乾杯で酒宴が始まった。杯が回るにつれて口も滑らかになっていった。想えば、同級生の中には貫録のある方も少なくなかった。

入学生の歓迎コンパで4年生の平均年齢よりも1年生の平均年齢が少し高かったのには驚かされた。入学が遅れたのにはそれぞれの何かがあったからだと思う。地方からの学生と都内からの学生との比は6対4であった。農業基本法が制定されたばかりで農業に明るい兆しが見えはじめたからだと思う。

宴も進み、1分間の自己紹介が始まった。子供の事、孫の事、健康の事、サプリメントの事等話は尽きない。タイムオーバーが続き、予定時間を過ぎてしまった。残念ながら、再会を誓って、記念写真に納まった。

地方からの参加者は小池さんに再度のお世話を頂き、新橋周辺で二次会に繰り出した。遅れてきた徳島県からの大串さんが合流し盛り上がった。更に、明日は府中に行く方々と三次会に行った。お洒落なワインバーで夜がふけるのを忘れて語り合った。「お年は幾つですか?程ほどに」

今回は残念ながら参加できなかった方々にも、次回は是非、お会い出来たらと思う。(福岡県支部長)



2. 「けやきクラブ」 —同窓会サロンとして—

渡辺 彰 (農工 S43)

「けやきクラブ」は「同窓会東京支部」の前身であるとともに、東京支部の結成にあたっての連絡事務所として機能し、現在も、東京支部とは密接な関係にあります。「けやきクラブ」は一般的な支部主催の会合とは異なり、メンバーは支部を超えた全国の会員を対象に考えています。先日も、関西の同窓会員から「都内で昔の学友と会うので、場所を使いたいのだが?」という問合せがありました。「けやきクラブ」の創意には、そのような『常設同窓会サロン』構築の狙いも含まれていたようです。

「サロン」として、階層を超えた「自由な会話」をモットーにし、時間と場所以外には特に決めごとはありません。農工大同窓会集团部会の「農工大支援ネットワーク」(略称AT-Netz)とも連携し、参加者の輪を広げる努力をしています。また、一歩進めて、同窓会員のみならず会員の家族や友人の参加もOKに



「新石橋の獅子」の舞

して、技術系特有の真面目さ、硬さなどから解放された「サロン」としての自由さを生かそうと考えています。最近では、少年時代の同級生、趣味を通じた友人など、第一線で活躍中の女性陣参加が普通になっています。人材開発コンサルタント、声楽家、器楽演奏家、日本舞踊家など、本来は講演会や鑑賞会でしか接することができない方々とも、同じ高さのフロアで話を咲かせることができます。

エネルギーに関する話は勿論のこと、ナノ粒子金属利用の話題でのナノとかピコという単位の意義、解剖学の話、脂肪酸の話、癌療養の武勇伝、東京湾の水質（富栄養の弊害）、出雲大社の遷宮、高尾山薬王院へのトレッキングの誘い、演奏者と指揮者との関わり、新石橋の獅子を演ずる際の意気込みなど、話題は様々なジャンルへ転々と廻り、展開していきます。男性に比べると、女性の方が共感性は高いという話もありますので、そのあたりの効果もあるのかも知れません。農工大生の男女比率は約7：3と示されていますが、今後は同窓会活動においても女性会員の活躍が期待されます。まずは、職場の友人同伴で「けやきクラブ」に参加されてはいかがでしょうか。

科学技術と社会安全についての問題が取り沙汰されていますが、科学技術の高度化や細分化の進行に伴い、各分野の研究・開発・実務を担う専門技術者の責任と社会性がこれまで以上に求められて行くものと考えられます。問題の解決やストレスからの解放は無理だとしても、「けやきクラブ」では、共感を得ることができるかも知れません。皆様の参加を、お待ちしております。

「けやきクラブ」開催のきまり

開催日時：毎月第3火曜。6：00p.m.～8：00p.m.

（祭日の場合は翌水曜日）

開催場所：J R新宿駅・東口。旧三越（現ビックロビル）の裏向い

ライオンビルB 1Fのライオンビヤホール、けやきクラブ席

会 費：3,000～4,000円/回

（女性、現役学生は優遇あり）

同窓会東京支部長；馬場 信行（林 S35）、

同窓・けやきクラブ会長；渡辺 彰（農工 S43）

3. 50年振りのグリークラブ演奏会

栗原 康明（工化 S43）

農工大を卒業後50年近く経ち久し振りにGlee Clubの有志が集まって、当時、国公立音楽祭で歌った「山に祈る」をもう一度歌おうと言う話が持ち上がりました。テープに録音してあった学生時代の演奏をCDにダビングした物を友人達に配った事も一つのきっかけに成ったのでしょうか。しかし、楽譜は既に絶版、懐かしい学生時代の思い出を捨てられずに取っておいたぼろぼろの楽譜を掘り出してコピーし、指揮者も当時の学生指揮者だった上玉利氏が再演の指導を快諾、月一回、遠くは岐阜からの参加者も含め熱心に練習を重ねました。

手始めに第50回国分寺市民文化祭の音楽祭に昔歌ったお楽しみ曲で出演、母校のキャンパスにも近く秋の一時を楽しく歌い好評を得たのが自己満足の始まり、ここまで来たら何とか本当の発表の機会を持つとうと全員一致、練習日も月一回から2回に増やし最初の練習から約一年の後に演奏会を持つことが出来ました。曲目も増やし黒人霊歌にも挑戦、団員の佐藤氏も悪乗りし無謀にもこの合唱団の持ち味を考慮して特別に編曲したオリジナル作品まで作っての演奏会でした。

演奏会は国分寺市立いずみホール、2014年4月12日に行われました。15名の団員にピアニスト、団員の奥さんでプロのナレーターを加え総勢17名で行いました。

聴衆が集まるかとの心配をする団員も多数いましたが、そこは修羅場を歩いて来た退職者集団、恥を忘れ集客にも奔走、何といずみホール今年の最高集客数である約300名の聴衆に聞いて頂きました。

山で遭難して息子を失った母親のナレーションの入る「山に祈る」の演奏は会場のあちこちですすり泣きし目に白いハンカチを押し当てるお母さん達も多数見られました。歌っている時は我々爺さん達も年甲斐も無く胸に来るものが有り冷静に成って歌う努力が必要でした。すっかり学生時代に戻って自己満足に浸る



一日で終演後の打ち上げで飲んだビールの美味さは格別でした。

このような感動を得られたのは学生時代に良き指導者だった恩師の益田典先生から人生の生き方、楽しみ方、合唱音楽の魅力を教え込まれ、「音楽を楽しむ」というウィルスに感染、いまだにその虜と成り卒業後も仕事の合間に合唱を楽しむ仲間が沢山いるから出来たのでしょう。合唱を楽しむアマチュアシニア合唱団が多数有りますがその多くの合唱団に農工大グリークラブの出身者が参加して中心的メンバーの一人として楽しんでいる事に驚きます。多感な学生時代に本当の音楽芸術の良さを教え込みその後の人生に多大な影響を与えた偉大な指導者に感謝します。学生時代に本物の芸術作品に触れその奥深さ楽しみに触れる機会が有った事は素晴らしい経験となりました。理科系の学生にとっては専門の学問のみの学生生活では得られない貴重な経験と成りました。

先生の弟子たちがこの様にシニア合唱団として楽しむ姿を天国から眺め、「お前たち、頑張っているな～、音楽的にはちょっと不満だけれど、楽しんでいるから良いか!」と言って下さればと期待します。

演奏会出演メンバー

Top tenor 長田 元、川口 忠男、中島 英生、
布施 登志男
Second tenor 栗原 康明、小番 柳司、澤邊 俊彰
Baritone 稲葉 進、佐藤 公男、廣田 昌右
Bass 野辺 博康、野辺 正範、橋本 信幸、
山田 倫宏

4. 林学林産音楽同好会？

横田 堯 (林産 S44)

昔々、農工大に林学科とそこから産まれた林産学科がありました。今では環境資源科学科に含まれる

のでしょうかね？

都内世田谷区は岡本の多摩川を見下ろす国分寺崖線の丘の上に、松本記念音楽迎賓館と名乗る音楽ホール付き会館があります。その屋上は二子玉川花火大会を盗み見る絶好のポジションとあり、その日は音楽家がワイン片手に集まってくる日となっています。

お話は昨年夏、その酒席の中に鍵盤演奏の師匠と他の演奏家に呼ばれる男が居たことから始まります。この男はひととき花火や酒に反応し、同席の「酔ったら右に出るものはいない」とされる筆者の高校の後輩の男と、他を圧する盛り上がりを示していました。

ふと、ドーン バチバチと空気を割く音の間から、ノーコーの言葉が漏れて来ました。濃厚なワインについて話しているのかと思いきや、どうも出身についてらしく、なんでこの演奏者が理科系の農工大と繋がるのだろうか？と怪しく思い、林産学科一期生の筆者としては改めて声を掛けねばならない立場に追い込まれ……

え！林学科卒業！それがどうして鍵盤演奏者に？こうした驚きが胸を射りました。

話は一年遡ります。筆者が事務局長を経験した公益財団法人音楽鑑賞振興財団は、その緑濃き庭園を地域のために活用するべく、環境保護の事業の柱を打ち立てております。その事業を推進していただいているのは隣接している(株)森林再生システム社となります。

みどりの講座を年4回企画、実施していただいておりますが、筆者のところに入入りされる一人に、杉の木のようにスタイルの良い、好奇心に溢れる女性がおられます。この人は音楽迎賓館のオルガンを見て、「経験はないけれど習いたい」とひとこと。

女性から経験がないと言われると何とかしてあげたくなる癖が出て、早速知り合いのオルガン演奏会にご招待。彼女が誘ってみえた友人とそれぞれ自己紹介をしたら、なんとみんな農工大卒。これも驚き！おまけに林学科の卒業生だそうで、まあ、仕事柄当然だったのかも知れません。

驚きはその望月亜希子さん(2001年卒)の方が強かったかもしれません。なんで



左から筒井氏、望月氏、横田

農工大の卒業生が音楽ホールの館長をしているのですか？

筆者は楽器の仕事に関わりたくて林産学科に学び、音響材料の担当でパイオニア(株)に入社、その後社内での音楽活動に芽生えたおかげで、会社創業者の創設した財団に異動したことから、今の仕事に至っています。

花火の夜、ほろ酔いの演奏披露会で、林学科卒業生の筒井一貴氏(1991年卒)はベーゼンドルファー(ピアノ)を心地よく導き、オルガンやチェンバロにも造詣が深いことが分かりました。学業の他に農工大学のピアノ部もご卒業とのこと。

話が弾んで、松本記念音楽迎賓館の地域開放日に、鍵盤楽器の秘密のレクチャーを頼みましたところ快諾。早速、隣の望月さんにその旨を伝えました。

「林学科の卒業生がオルガンを説明し演奏してくれるから、農工関係者を集めてよ」「なんですかそれ？」

しかし、こうしたことはなかなか順調には行かず、やっと実現したときは、演奏：筒井、司会：横田、お客様は望月女王様ひとりの世界。(写真)

筒井氏のお話はこれまで知らなかった情報に満ち溢れ、そして熱いのに。

これはあまりにもったいない。三人中三人が音楽好きなのだから、きっと林学を学んだ人は100%音楽ファンに違いないと統計的に決めつける私たち。

この日から全農工大関係者のご意見をいただくことなく、林学音楽同好会が勝手にスタートしたと提供いただきたい。異議のある方、私を置いて同好会を語るなおっしゃる方、そして筒井さんの演奏が聴きたいとおっしゃる方は03-3709-5951 松本記念音楽迎賓館にご連絡願います。チャンスを作ります。

以上

筒井一貴 ホームページ；

<http://www.h3dion.ne.jp/~bergheil/index-J.html>
森林再生システム <http://www.re-forest.com/>
松本記念音楽迎賓館 <http://ongakugeihinkan.jp/>

5. 富山支部の悩み

小杉 啓一 (林 S54)

5月の富山県は乾燥した晴天の日が比較的多いこともあり、残雪に白く輝く立山連峰がくっきりと田植え前の水田に映り、よくぞこの郷土に生まれたと思う。

時折、新聞紙上で大学の名前を見つけると嬉しくなり、老化した頭脳では理解に苦しむ研究開発の内容を貪るように読むのだが、結局世のためになる研究をして世間から評価されているのだと一人納得する。

さて、毎年3月上旬に開催される本県の支部同窓会の出席者は、中高年の固定層+若手がちらほら(それも毎年入れ替わるのはなぜか)で15名前後、1年間のご無沙汰ですとの挨拶から始まる。同窓会から派遣していただいた先生による大学の近況の話に耳をそばだてて、自分たちの大学生時代との乖離に驚きつつ、女子学生が半数にも達するとの話に、これが昔だったら自分の人生も変わっていたらと妄想を巡らす身の程知らずの輩もいるのである。

支部同窓会の喫緊の課題は、参加者の高齢化である。60歳に届こうという私でさえ宴会では末席に近い場所を占めるようでは、先輩諸氏には失礼ながら、今後出席者が漸減していくことは明らかである。若年層にも参加しやすい環境づくりということで、去年は経費の安い会場を探して会費を半分程度に抑えてみたが、やはり出席者の増加にはつながらなかった。

若手とも話してみたが、彼らが言うにはジェネレーションギャップが昔以上に大きく、共通話題がない(学生時代の思い出話ひとつを取っても隔たりがある)、趣味多彩で休日には他の予定が入っているなど、支部同窓会へ出る必然性がないということであった。怖い先輩がいて、出席して当たり前、欠席などは言語道断であった私らの若かりし頃とは、社会・生活環境なども大きく変わっているのである。

どうすれば若手の出席率を増やせるか思案しているが、妙案は浮かんで来ず、来年は繰越金を取り崩して、会費相当以上の「おもてなし」をして、参加者を増やそうかなどと幹事と姑息な策略をめぐらしているところである。各県の支部で妙案があれば教



平成26年3月8日開催の富山支部総会



立山から流れ落ちる
称名滝（落差350m）

えていただきたいものである。

終わりに富山県のPRをひとつ。来年春には北陸新幹線が金沢まで開通し、東京から富山まで2時間7分で結ばれる。標高3千mの北アルプスから深さ1千mの富山湾に至る標高差4千mで生み出される美しい景観や美味し

い米、野菜、魚そして辛口の酒を堪能しに多くの方がお出でくださるよう、心からお待ちしております。
(富山県支部)

6. 囲碁部へのエール

大橋 統州（農 S54）

後輩からの便りで囲碁部の活躍を知らされ、ホームページで確認して驚きました。

なんと、関東学生囲碁団体戦（リーグ戦、春・秋）で5部ある中で第1部への昇格を成し得たというものでした。残念ながら23年春季と24年秋季の2期だけの短期間で第2部へ、現在は、春（平成26年5月）の大会で苦戦し、秋は第3部降格になったようですが、よく頑張っているようです。

私が在学していた昭和50～53年度当時は、リーグへの参加校も多く、8部ありましたが、その中の第6部と第7部を行ったり来たりの成績でした。1年生のときから部長を任されましたが、リーグ戦が連休に行われることもあって、必要な参加者5名を揃えることがやっとのときもあり、1部や2部などは各大学にアマ全国代表クラスがいて、はるか雲の上の存在でした。

私が卒業してかなり後に、部員がプロ棋士の三王裕孝九段の指導を受けられたと聞きました。

若い学生がプロの指導を受ければ上達は著しく、成績が上がったのもうなづけます。

たとえ、短期間であってもトップ集団の第1部に昇格したという後輩のがんばりに敬意を表します。

昨今、遊びの種類も増え、囲碁のアマチュア人口は減少傾向にあるようですが、囲碁はハンディキャップのシステムがしっかりしていて、老若男女、実力差が

あっても対等に試合ができ、棋書を読むなどいろいろに楽しめ、一生の友として付き合っていけます。

また、今やアジアだけでなく欧米も含めて世界的なゲームとなっています。

理系の国立大学である東京農工大学ともなれば、勉学を修めるだけでも大変です。その中でも、日本文化である囲碁を部活として大いに楽しみ、学生生活の潤滑油としてほしいと思います。

私も大学を卒業し、就職してからかつての部員とも全国に離ればなれになりましたが、狭い部室で少しでも強くなろうと囲碁を打っていたことが今もなつかしく思い出されます。

当時の現役の部員には極端に強い猛者がいなかったため、合宿でOBの先輩に指導碁を打ってもらった時には「本当に強い人がいるなあ」と思いました。

その点、プロ棋士の指導を受けられたことは、後輩達にとって一生の宝物であり、本当に羨ましい限りです。

今後も、リーグ戦では、さらなる高みをめざして頑張してほしいと思います。強い相手と試合をすることは、囲碁が上達するだけでなく、人としての資質を高めていく上で得るものがあると思います。

遠く、青森にいてもインターネットの普及等で、後輩の活躍の情報が、少しですが入るようになりました。これからも応援しますので、囲碁部の皆様、再び第2部、いや第1部昇格を目指してがんばってください。
(青森県支部)

7. 同窓会への思い

斉藤 一夫（織高院 S61）

母校を修了し、早くも28年も経ってしまった。お陰様で社会人生活も同じ会社で29年目になる。月日が過ぎるのは早いものだ。今振り返ると、がむしゃらに会社の仕事に打ち込んできた。その間、母校との関係も多少なりはあったが、そんなに深いものではなかった。

28年を振り返ると、大きな転機や失敗をいくつか思い出す。若いころは、上司に悪態をついたなどの些細な失敗（当時は深刻な悩みであったが）が多かった。年を重ねていくうちに、組織の行く末を判断しなければならぬ場面が多くなってきた。その組織も、始めは数人レベルから、数十人以上のレベ

ルの判断も要求される。たとえば100人の従業員が関係する場合、家族を含めると、数百人に影響が及ぶことになり、ぞっとする時がある。

母校を含めて、日本の理系の大学では失敗を勉強（失敗から学ぶこと）するカリキュラムはほとんどないのではないか。欧米のビジネススクールでは、この失敗から学ぶ時間が多いとも聞く。

私自身、数多くの失敗を経験して、失敗から学んだことがとても多かったと感じる。成功体験より失敗体験が自分を成長させたとも思える。でも本心と言えば、避けられる失敗はしないほうがいい。

新入社員としての数年間の失敗はどんどん経験すべきであろう。しかし、管理職としての時期は、先人の経験に学ぶべきである。社内の先輩から、また社内の事例でもある程度は学べる。しかし、新しい挑戦をする時にはそうはいかない。このような場面で、同窓会が役に立てないだろうか。先輩が気楽に経験や失敗を語れ、自然に若い人の成長へ活かしてもらおう。具体的にどうすればよいかはまだ分からない。しかし、身近のところ、たとえば同じ研究室の集まりや、学生などと触れ合う機会を増やしてみようと思う。カッコいい自慢話は2回で飽きられるが、失敗談義は奥が深い。

私、2013年4月に、縁があり会社員を続けながら母校の博士課程の学生になった。現役学生として、また卒業生として微力であるが同窓会に貢献したいと考えている。同窓会の強さが卒業生の成長、そして母校の発展に繋がると強く信じている。



8. 55年後の同窓会開催を目指して

田中 祐圭（工博生 H20）

つい先日、父から小中学校の同窓会に出席し55年ぶりの友人に会ったと連絡があった。息子（私）としては、父は福岡県から上京後、仕事や家族を優先し

このような会には参加できなかったのだらうと複雑な気持ちになる反面、卒業後数十年間、恐らく継続的に同窓会が開催されているという強いつながりを持つ小中学校の有り様をうらやましく感じた。一方で、私が卒業した県立相模原高等学校の同期による同窓会が卒業後十数年ぶりの2011年に開催された。私は実行委員でありながら急遽、留学することになり出席できず、ひそかに次回開催を心待ちにしている。

私は1999年に工学部生命工学科に入学し、最初の3年間は学業に励む傍ら、予備校のアルバイトに明け暮れていた。夏休み中に17日間連続勤務し、時給1,000円に満たないであろう月の給与が15万円を優に超してしまったことを今でも鮮明に記憶している。いつしか私のあだ名までもチューター（予備校内での補助指導員のような立場の総称）となってしまったことを懐かしく思う。研究室に配属後は微生物の研究に没頭し、博士号を取得後、英国に留学した。現在は10年以上お世話になった農工大を離れ、縁があって東京工業大学大学院理工学研究科に所属し研究を進めている。その間、恩師、先輩、友人、後輩に恵まれ、多くの人々に助けていただきながらどうにかやっている。大学に入学してからというもの、個人の無力さと共に農工大を接点とした人と人とのつながりのありがたみを痛感してきたような気がする。

農工大で修士課程修了後、研究室の仲間や一部の友人をのぞいて、同学科の同期入学生およそ100名と連絡をとる機会がなくなってしまった。類は友を呼ぶというが、私が入学してすぐに集まった10名程度の仲間は未だに良い関係が続いている。しかしながら入学時にあたる二十歳前の個々人の“類”は、恐らく社会にもまれて変化を遂げていると思う。せつかくの農工大同期生という接点を発展させるためにも、ぜひ同期の皆とまた顔を合わせて近況を報告し刺激を受けたいと思う次第である。そして卒業から55年後もそのような会を継続して開催できていたらそれほど素晴らしいことは無いのではなからうか。先日恩師が“知り合いは歳をとってもいくらでもできる。ただ、本当の友人を作ることは本当に難しくなる”とおっしゃっていた。恐らく多くの卒業生もそれを実感しているのではないかと思う。もし、この原稿を読まれた農工大卒業生の皆様が同期会や同窓会を通じて、農工大を接点とした友好を広げる一つのきっかけとなれば幸いと思う。私も億劫がらずにそれに向けた一歩を踏み出そうと計画中である。

Ⅲ. 出合いを活かす

1. 還暦を過ぎて森林調査

本山 芳裕 (林 S48)

昨年5月の総会にて、副会長(林学部会長)を仰せつかりましたことは光栄なことと存じ、前部会長の松井大先輩、関係皆様のご推挙に御礼を申し上げます。しかし、浅学菲才



ヤマブドウ
(南アルプス三峰川2009年)

の身で、また、部会運営の策もないままお引き受けし困っていたところ、寄稿の機会に恵まれ、まずはご挨拶を兼ねて本稿を提出申し上げる次第です。

省みれば、昭和44年に入学を許可され、48年に卒業、今年の誕生日で満64歳。最早、来年以降は3つ目の職場である現所属会社においてくれるかどうか微妙にて、過ぎた日々の早さを実感しています。とはいえ、「林学」卒の故、森林・林業と離れ難く、この5年続けて社業の森林調査に従事しています。

内容は、「京都議定書」に基づくもので、1990年以降の保育・間伐等の施業による「管理森林」の確認と林況の調査です。これまで、16都道府県における国・民有林の調査の機会を得ており、頻度が高い長野県では、佐久から木曾、小谷・秋山郷から天竜まで各地を踏査しました。

ただ、調査の対象が育成林のため、造林限界を超えて風光明媚な山岳稜線に至ることは希で、寧ろクマ、マムシ、スズメバチ、ヤマビルに気を付けなければならないことは残念です。

具体的な作業では、調査の発注機関である林野庁から指定された小班(所有者別に定める林況や施業を同一とする森林の区画)の位置をデータ化し、それをインストールした機器を手に現地を探します。林道の近くで「ラッキー」なこともあります。多くの場合、予定した尾根や沢を魚釣用のスパイクブーツで只管

歩くこととなります。

例えば、治山関係者をご存知の飯田市の北西、中部森林管理局が実施する「松川入民有林直轄治山」の箒沢地区に、森林組合や関係者から「示せる道は無く、ササ刈・山泊の準備をし、遭難騒ぎだけは起こさないで」とのご注意の下、数年連続して到達できなかった箇所がありました。しかし、昨年、地形図を見る内に、いくらか緩そうな沢と尾根に可能性を感じ、風化した花崗岩類の崩壊地が続く沢を遡上、背丈を超えるササが密生する尾根に取り付き、4時間半で標高約1,500mのカラマツ林に辿りつきました。

自分は、こういった現地調査の基礎は、大学での授業はもとより、特に、唐沢山での「測量学実習」、草木での「造林学実習」等の演習林における実地体験により形成されたものと心から感謝しています。利便性が益々高まる経済社会にあって、現地を歩くことにより、先達が遥か深山で造林し、資源の持続管理に向けて積み重ねてこられた努力を実感できる気がします。また、こういったことを背景として、昨年、林野庁による初の「森林総合監理士(フォレスター)」試験に合格できました。

これからも母校を大切に思いつつ、高齢者の登山事故の増大傾向に鑑み安全に十分注意し、可能な限り現地に即した仕事を続けていきたいと考えています。

(林学部会長)

2. 二十歳の魂

山田 尚公 (林産 S55)

「三つ子の魂百まで」と言うように、人格形成には最初が大事ですが、嗜好は二十歳前後の頃に決まってしまうようです。ちょうど農工大学でグズグズと青春の浪費をしていた頃に好きだったものは今でも不思議とたいせつにしています。卒業して34年、かなり昔のように思えますが、母校を訪ねてみると学生の雰囲気には昔と同じ様なカラーがあるように見えます。年長の先輩も同じ印象を持っていると言います。学問の世界での時代の変化はゆるやかで、30年以上の時間で大き

く変わった事は少ないと聞きます。バブル景気とそれの崩壊、パソコンの普及とインターネットの登場による情報の氾濫が時代を変えたのは事実です。しかし、激動の時代や時代の節目などと言っても数十年～百年の時間でみると何でもない場合があります。それよりも大きな価値観によって人間は支えられているのではないのでしょうか。二十歳の頃から変わらず大切にしているものが私の中にあります。

私は祖父が始めた木彫刻の家に生まれました。今思えば、木の中で育った者が呼び寄せられるように、大学で木の勉強をするのは運命的な出来事でした。残念ながら学校の勉強は最低限で、下宿にこもって本を読み、音楽を聴いていたのが私の学生生活でした。高校を卒業して東京に出てすぐに祖父と親しかった棟方志功が亡くなりました。二十歳の頃にその追悼のムック本が出版されました。今もその本は手元にあります。ボロボロになってしまいましたが、今やっている木版画教室の一番たいせつな教科書です。何度読み返したか分かりませんが、何故か新しい発見があるのです。私は最低の学生でしたが、学校は私が思っているよりずっと立派なもので劣等学生に無理やりにでも学問の入り口がここであることを教えてくれました。悶々と息

苦しいような学生時代で、すべてが断片的でつながりを持たず何の成果も得られないままでしたが、ここで学問にわずかでも触れた事がその後の人生の「矜持」を支えているのは確かです。混沌とした「二十歳の魂」はやがて整理され



生きる意志として構成されていきます。やや大袈裟ですが、「木」に「勉強」を加えてできる事のひとつとして私の仕事を確立しようとしてきたのです。生まれ育った環境が最も大きな動機ですが、農工大学で触れた多くの事が今の仕事を確かなものに育ててくれたのです。

私は今、岡山県北部の美術工芸作家を集めたイベントを企画運営しています。岡山は天災が少なく気候も温暖で安全と言われ、県外からの移住者も含め多くの若いアーティストが住んでいます。その人達と社会を

おもいで話 1

Communication 三題

高島 貢 名誉教授 (電気工学科)

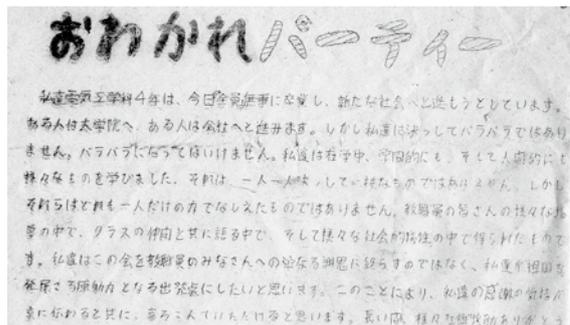
心に残る、Communicationに関する3個の形式のお話を述べます。まず、明治初期の頃に、本学の前身、いわゆる「蚕事学校」の佐々木長淳先生のお話です。先生は顕微鏡を駆使して、蚕の病気を調査研究し、その結果が大久保利通卿の知るところとなり、蚕の病気が蔓延していた欧州で発表せよとのことで、佐々木先生をイタリアのジェノバに出張させたそうです。発表後の翌朝、ホテルで現地の新聞に先生の調査研究の観察スケッチ図が出ていたので驚き、夕方のパーティーでは、ルイ・パスツールのtableに席が用意されていたそうです。なお、パスツールはフランスのパスツール研究所で知られる、近代細菌学の開祖と呼ばれている学者であり、ジェノバは当時、現在も、地中海沿岸では陸揚げ量第1の港湾都市です。もし、この発表が裏打ちされれば、観察スケッチ図の発表は、西洋の文物や概念の紹介が主だった当時の日本の時勢にあって、すばらしいと思います。

次に、日本が第2次大戦で負けた頃、戦勝国のインドのネール首相が日本国民に「進取の気性に富んでいる」の賛辞を、日本の子供たちにインド象をプレゼントなされた(S.24.9.23 芝浦着)そうです。意気消沈してい

る国に対して、大人への励ましの言葉と子供への贈り物は「格がある」感じですぐれていると思います。

最後に、昭和44年頃の学園紛争の後、それまでは、『謝恩会』が普通だった流れにあって、卒業・修了の学生から、粗末な「わら半紙」を手渡され、「先生、『おわかれパーティー』に出席してください」と言われたとき、私は「ああ、糸が繋がっている」とうれしくなりました。わら半紙(わらばんし)はB4判の紙で、それには、手書きのガリ版刷りで、「……このもえたぎる苦しさは 明日も続くのか…… (サトウハチロー作詞「悲しくてやりきれない」の一節)」の歌詞や「Lim n→∞」などのイラストが散見していました。

やるせない気持ちと先行き不透明な未来をみつめている若い青年の印象がありました。当時、学生と大学の間がギクシャクしていましたが、わら半紙にガリ版刷りパッセージ(ぶらぶら歩き?)の形式が感動的で、りっぱだと思います。



ガリ版刷りわら半紙

結んで「アートによる地域おこし」をやってみようというアイデアです。アーティストは職業柄か美しい事や楽しい事は得意ですが社会的な事業となるとなかなかまとまらないのが問題です。そこで私のように公務員養成所のような学校を出たアーティストが役に立つのではないかと考えたのです。まだ始まったばかりで張り切りすぎて空回りする事も多いですが、地域社会での認知度は上がってきて少しは手応えが得られるようになりました。

3. 飛行機中年（…初老？）と素晴らしい人々との出会い

藤本 朗（機械 S57）

早いもので農工大を卒業して30年以上が経ちました。

農工大では、最初は空手部に籍を置き、良き仲間にも恵まれました（農工通信86号、柳田氏著「Ⅱ-2-7. 緩やかな関係」参照）。4年時の研究室（望月研）では、良き教官・先輩、それに同期の仲間にも恵まれ、夜遅くまで実験に没頭し、人生や夢について語った日々を思い出します。

卒業後、小生は故郷の大学院に進学し、流体力学を専攻しました。実は、小生は子供の頃から飛行機大好き少年でした。学部時代は真剣に勉強に励んだ記憶はありませんが、進学後は、かなり真面目に取り組みました。卒業に必要な単位の2倍は取得し、英語力向上にも取り組みました。結局、博士課程まで進学し、研究室のOBに誘われて現在の会社（川崎重工業）で働くことになりました。ただし、配属先はOBが全く居ない航空機部門を希望し、幸運にもかなえられました。

入社して驚いたのは、あの名機“飛燕”の設計者、土井武夫先生がご健在で、顧問として会社におられたことです。その数年後、先生が仙台でご講演された折は、小生がカバン持ちを務めさせて頂きました。ホテルの部屋までご一緒させて頂いた2泊3日の旅。先生から様々なご経験談や人生観、仕事に対する考え方等を伺えたことが、今日の小生にとってかけがえのない財産になっています。

その後ある上司の計らいで、シアトルのBoeing社で将来旅客機の基礎設計に従事する機会を得ました。帰国後、防衛省殿の大型機（現P-1/C-2）を

開発することになり、小生は空力設計と関連風洞試験を取りまとめる立場（空力課長）になりました。当時は、苦しくもワクワクする日々を過ごしていましたが、2003年夏のある日、小生はあるプロジェクトの準備チームに異動することになりました。そのチームリーダーは、数年前、小生にシアトル行きの機会を与えてくれた方でした（今では“人生の師”と仰ぐ方です）。小生の最初の仕事は、開発における技術的な責任分担範囲をBoeing社と交渉することでした。ここでも、交渉相手を含め、多くの有能な素晴らしい人々に出会いました。そのプロジェクトは、やがて「787」と呼ばれるようになりました。

それから11年、怒涛の日々を過ごし、気付くと川崎787チームの最古参メンバーになっていました。今年（2014年）の3月でこのチームを離れましたが、最後は、技術担当サブプロマネを仰せつかっておりました（実は、川崎の生産担当サブプロマネも農工大出身の方です。この業界では数少ない農工大出身者ですが、人の縁は不思議なものです）。

人生の節目節目で素晴らしい人々に出会い、大きな影響を受けながら、少年の頃の夢をこういう形で実現できたことは、非常に幸運でした……“自分以外は、皆、先生”なんですね。



土井武夫先生（90歳）と若き日の著者
（1995年5月東北大学にて）



787の最終飛行試験と著者
（2011年7月、中部国際空港にて）

4. アフリカで長年ご活躍されている 堤 可厚氏の講演を聞いて

対馬美香子（獣医 H2）



平成25年7月6日に獣医学部会研究・講演会が開催されました。講演会では、本学獣医学科を昭和37年に卒業され、現在はザンビア大学医学部感染症講座主任教授の堤 可厚氏にご講演いただきました。

堤 可厚氏は主にアフリカで、50年近く感染症関係の医療に携わっておられます。特に中央アフリカの国ザンビアでは、国内唯一の大学であるザンビア大学に獣医学部を創設・運営するプロジェクトに10年以上携わってこられました。ザンビア大学は1988年には同国初のザンビア人獣医師を輩出し、今では近隣諸国に指導者を派遣するまでに成長しています。

堤 可厚氏は故シュバイツァー博士に1963年にガボンで会われています。その際に、博士がふと漏らした言葉が、「私がランバレネに病院をつくった当時、このあたりにはチンパンジーやゴリラが沢山いましたが、最近すっかり見かけなくなりました。森の中で沢山のサル類が死んでいると患者さんたちが言っています。何か恐ろしいことが起こっているような気がします。」だったそうです。その言葉通り、マールブルグ病やエボラ出血熱など新しい人の感染症が発生し、さらに、ヘンドラウイルス病、ニパウイルス病、SARSコロナウイルス等々、次々と新興感染症が現れています。堤 可厚氏は1967年のハンブルグ大学留学中にドイツでのマールブルグ病の発生、1975年のジンバブエのWHO感染症プロジェクトで再びマールブルグ病の患者に対応、また、エボラ出血熱の現場、ガボンでの同僚の感染死など、多くの新興感染症の最前線で闘ってこられました。

シンガーソングライターのさだまさしさんの「風に立つライオン」という曲をご存知の方も多いのではないのでしょうか。アフリカで現地の医療に青春をささげた日本人医師のことを歌った歌ですが、この曲のモデルは堤 可厚氏で、30年ほど前に、さだまさしさんが堤 可厚氏にお会いした際に聞いた、アフリカの医療事情

や生活環境の驚きと感動を歌にしたのだそうです。

堤 可厚氏のアフリカでの活躍は、世界的免疫学者で文筆家としても知られる東大名誉教授多田富雄氏のエッセイを集めた著作「独酌余滴」（朝日文庫）にも度々登場します。中でも、多田氏が南アフリカの国ジンバブエの首都ハラレに堤 可厚氏を訪ねた折に聞き取った、ケニアのマサイ族の長老に聞いた深く教えられる話などを詳しく記した“からだの声をきく”は、高等学校の教科書「標準国語総合」（第一学習社）にも掲載され、多くの高校生に読まれています。このエッセイに触発された高校生の中から、次代の医学、獣医学を担う優秀な人材が誕生するかもしれません。

堤 可厚氏は、狂犬病を含めた新興・再興感染症の自然宿主として、近年、コウモリが浮上してきていることを注視されています。特に、コウモリに興味を持っていた生物学者、獣医師38名のうち、20名がここ10数年のうちに急死していることが気になると話しています。

堤 可厚氏はこれからも感染症の現場でますますご活躍されることでしょう。

5. 子供たちの笑顔に癒されて

岸本 亮（応生 H7）

平成7年4月に林業技師として、静岡県職員に採用されました。昨年からの中央に位置する藤枝市にある志太榛原農林事務所に勤務し、森林環境教育の仕事の担うようになりました。

環境教育はゴミの削減、二酸化炭素の問題や、海川をフィールドにした体験などいろいろなものを含みます。その中でも「森林」に特化した仕事を進めています。

志太榛原農林事務所が管理する、自然フィールドに「榛原ふるさとの森」という場所があります。約25haの面積があり、クヌギ、コナラ、スギ、ヒノキ、マツ等の多種多様な混交林で、田んぼ、まぼろしの池など里山をイメージした森林となっています。オオタカの営巣地があり運がよければオオタカが滑空する姿を見ることができます。さらに入口から20分ほど山道を登ると富士山静岡空港が見渡せる場所があり、離着陸する飛行機を間近に見ることができます。

地元の幼稚園、小学生が「榛原ふるさとの森」を利用します。お弁当をはさんで3時間くらいの自然体

験プログラムを体験してもらいます。実際の体験内容について紹介したいと思います。

都会の中の公園とは違い、舗装されていない急な坂道、へび、蜂などの危険生物、秋にはかぶれてしまう「うるし」、毒キノコなど、危険がいっぱいです。自然を前に子供たちはわくわく感いっぱい、いくら注意しても、大人の言うことは聞きません。そこで大切なのが最初の「つかみ」です。子供たちの興味をつかんでしまえば「この人はなんか面白いことをしてくれる人。だからこの人の言うことは聞こう!」となります。そんな時はこんな感じで自己紹介を始めます。「どうも。今日一日一緒に山を歩く岸本です。岸本って言いにくい名前だよ。だから今日一日は『きっしー』と呼んでください」と言って飛び跳ねます。千葉県のとあるゆるぎゃらのおかげで効果は抜群です。

体験中は、必ず子供たちのペースで歩きます。カエル、沢かになどの動物、へんな花、気になるものがあれば、飽きるまでそこで止まって観察します。疲れればそのまま道ばたにゴロンと転がって山の空気を

おもいっきり吸ってみたりなど。花や木の名前なんか詳しくなくても、「名前は分からないけど、変な匂いするよね」など子供の視線にたって話を合わせることで、親近感が湧いて意外な発見をしたりすることができます。帰ってきてから、子供たちが素直に感じたことを発表してもらくと、一緒に歩いて本当に楽しかったなあと感じることができます。



普段は事務所の中でパソコンとにらめっこしながらの仕事が多いですが、大自然の中でなにかを吹っ切った子供たちと過ごせる時間があることは、すごく幸せだなあと感じるこの頃です。

おもいで話 2

父（清水賢）との約束

清水 直（電情院 H11）

私の父『清水 賢』は東京農工大学工学部の教授として『遠赤外線』について研究に努め、平成8年に退官致しました。父の退官後、私が同大学に入学することとなり、何か縁たるものを感じております。

父の人柄は明るく前向きで、とてもにぎやかなことが好きな印象が残っております。教授として在籍していた際は、教え子を家に呼んで食事会をしたり、退官後は孫たちとの触れ合い、そして、趣味の読書、ウォーキング、サイクリングなど好きなことをした充実した日々を過ごしておりました。その父が亡くなりましたのは、忘れもしない東北大震災の年、平成23年の夏8月21日、急性心不全でした。私は同じ東京都でしたが、少々離れたところに住んでおりましたので、姉から連絡を受け、実家近くの病院に駆けつけた時には、すでに亡くなっておりました。

母によれば、父は亡くなる当日もいつもの通り、元気に起床し、朝食を食べた後に新聞を読み、そして、ソファーに座り大好きな昼寝をしていたままの状態が最期を迎えたとのこと。その姿は今にもまた目を覚ますのではないかと思うような表情だったと聞きます。現に、私も病院に駆けつけた際に見た父の顔はとて安からで本当にただ眠っているだけなのではないかと思うようでした。

私は父が亡くなった時に生前の父との約束を思い出しました。

この約束は父が亡くなるちょうど2年前のこととなりました。私だけを呼び出し次のことをお願いされました。『もし、葬式の際は自分（父）のあゆみを紙にして皆に配布してほしい』ということ。皆に自分（父）のあゆみを知ってもらいたいという思いがあったようです。

この約束のことを正直、父が亡くなるまでは忘れておりましたが、何故かふとした瞬間に思い出したのは今でも本当に不思議に思います。もしかしたら、父が思い出させてくれたのかもしれませんが。

私は『父のあゆみ』を深夜遅くに一心不乱に作ったことを今でもよく覚えております。そして、色々とおわただしい日々の中、無事に葬儀を迎えることができました。

二日目の葬式の最後の私の挨拶の際に、実はもう一つ父と約束していたことを皆さんにお話ししました。

二つ目は『自分（父）が亡くなったら、母、姉含め身内が皆悲しみ気持ちが沈んでしまうかもしれない。酷かもしれないが直（私）だけは涙せず毅然とした態度で皆をまとめて葬式をし、私（父）を送り出してほしい』ということ。この二つ目の約束はこの挨拶の時まで身内の誰にも言わず、私の中でしまっておきました。『葬儀の時まで誰にも言わないこと』。これも父との約束だったので。

この最後の挨拶の際に正直、感極まり涙しそうでしたが、なんとか最後まで挨拶できたと思います。父との約束、ちゃんと守れたかどうか本人に聞いてみたいものです。



IV. 技術・研究を語る

1. 一生繊維

千葉 茂雄 (織工 S38)

1963年卒業の頃、『繊維』は斜陽産業の代名詞のようになっており、織物会社に就職した私の一生を示唆していたように思えます。つい最近、^{たてあげおり}経畦織組織をベースとする特殊織物の特許出願明細書を作成した際にも、未だに織物の教科書を紐解くのは私だけかなとつくづく思い、又、近年出現した『超極細繊維』も古い先細く短い私の最期に二重写しに見えてくるのも年寄の癖みと言うべきか？

と言えば、何が因果か繊維に絡み付かれた私の人生はお先真暗かと言うことになりましたが、弁理士となって織物会社を辞め、独立して特許事務所を始めて36年間、繊維関連会社の方々には本当に励まされて来ました。繊維技術は開発尽くされている、繊維技術に発明はない、繊維技術の特許出願などはありませんと思っても、繊維関連会社の方々は必死になって鋭意、努力されたのでしよう、時として素晴らしい発明をし、特許出願の依頼に来られることがあり、その都度、敬服している次第です。

確かに、平織、斜紋・綾織、朱子織と言った三原組織を基礎とする^{よこあげおり}経畦織や緯畦織等の幾多の変化織組織は考え尽くされて広く公知になっていますが、その公知の織組織を用途に応じた種々の織物や材質の異なる種々の織物に適用した場合に如何なる効果結果が生じるかは当然に予測し得るところではなく、それ故に特許出願が耐えないと言う訳です。

ゴミが付着し易くしたダストコントロールマットやゴミ取り印刷ロール、超極細繊維を使用した人工皮革や眼鏡拭き、わざわざ繊維を劣化させるストーンウォッシュ加工等は、1963年卒業の頃には想像することも出来なかったことです。そして、今はリサイクルとかと言って廃棄繊維製品の粉碎技術も進歩し、その一見ゴミとも思える微細な粉碎物にも素晴らしい機能があって高い付加価値も期待されます。古い先短いは言え、私にも藁を原料とする面ファスナーのアイデアがあり、展示し得る程度に仕上げた商品を試作しており、若し、本当に商品化したい

方がおられるならお教え致したいと思っております。

先日、特殊織物の特許出願手続を終え、弁理士稼業も若い後継弁理士に譲って引退し、糸瓜を植え、糸瓜繊維を取り出して新商品を試作しようかとか、2~30年前に製作した手織り織機を使用してタペストリーでも試織しようかと思っていると、ある大学教授先生が特殊織物を発明したので、是非、相談にのって欲しいとのことで何時まで繊維が続くことや、繊維技術に対するファンも結構多く、結局一生繊維と言うことになりそうです。

つくづく思います。斜陽産業と雖も繊維産業には時代に応じた発明発見があって特許出願が続くように、定年をとるの昔に過ぎ齢七五歳を越えてなお人生無限に続き、悩みも喜びも姿を変えて現れるのなら、更なる希望を持つべきかと思えます。

農工大に入学し西ヶ原寮に入寮したとき、アコーディオンを弾きながら先輩の吉田泰三さんが教えて下さった西ヶ原寮歌に『芙蓉の峰を仰ぐ眼も希望を満ちて光あり』とありました。

2. 婦人靴下 (ストッキング) の変遷とともに

本田 泰信 (織工 S38)

昭和38年3月工学部繊維工学科を卒業し、4月に郡是製糸(株)(現グンゼ(株))に入社。新入社員研修受講後、京都府綾部市にある本社工場へ配属されました。



郡是製糸(株)は綾部市が発祥の地で1896(明治29)年京都府何鹿郡の是(方針)として会社が設立され、社名の郡是(郡の方針)の由来でもあり、創業の精神は人間尊重・優良品の生産・共存共栄であります。入社当時会社の事業は生糸・靴下・メリヤスの3本柱が主力で配属された本社工場は婦人靴下のトリコット靴下を生産しておりました。

郡是製糸(株)は綾部市が発祥の地で1896(明治29)年京都府何鹿郡の是(方針)として会社が設立され、社名の郡是(郡の方針)の由来でもあり、創業の精神は人間尊重・優良品の生産・共存共栄であります。入社当時会社の事業は生糸・靴下・メリヤスの3本柱が主力で配属された本社工場は婦人靴下のトリコット靴下を生産しておりました。

綾部市には敷地7万坪の中に本社工場の他に綾部本社、研究所、蚕種製造所、生糸事業部、機械事業部等があり、将に、企業城下町の様相でありました。当時の会社幹部は所謂、三繊維（東京農工大、信州大、京都工繊大）出身者が占められていて、主要なポジションに多くの先輩が居られご指導ご支援を賜り恵まれた若年時代を過ごしました。（本学学長にご就任された諸星静次郎先生も蚕種製造所に居られました）。

婦人靴下（ストッキング）のルーツは15世紀頃ヨーロッパの男性が着用していた靴下という説や1560年にエリザベスI世女王が初めて手編みの絹靴下を履いたという伝えもありますが、1864年にウィリアム・コトンが絹のフルファッション（横編、略してFF）靴下を発明し、女性のファッション商品として普及しました。グンゼ（株）は1934（昭和9）年に塚口工場でFF靴下を生産開始。また、本社工場は1950（昭和25）年にトリコット（経編）絹靴下を生産開始。1952（昭和27）年以降素材の絹糸が丈夫なナイロン糸に変わりました。1960年頃シーム（縫目）のないシームレス靴下が開発され、丁度、入社した1963（昭和38）年当時は本社工場はトリコット靴下からシームレス靴下へ塚口工場はFF靴下からシームレス靴下への転換時期で、3年後には全面的にシームレス靴下に置き換わり、FF靴下・トリコット靴下は市場から消えていきました。消費者にとってはシームを気にしなくて良いというメリット、生産者にとっては円筒状に片足分ずつ編立し、爪先だけの縫製でナイロンの熱可塑性を利用した染色仕上という低コスト生産のメリットがありました。更に、1964年にアンドレ・クレージュがミニスカートを発表してからシームレス靴下の需要が減少し始め、英国のモデル：ツイッギーの来日効果もあり、従来のガードルとストッキングの組合せによってできる隙間をカバーすべく下着であるパンティと靴下であるストッキングが一体化した衣類のパンティストッキング（略してパンスト）が開発され、急速に普及現在に至っております。パンストは腰から爪先まで覆うため使用糸に高度な伸縮性が求められ、弾性糸（カバリングヤーン）が開発され素材として定着し、そのカバリング糸とナイロン糸との組合せの変化で各種のサポートストッキングが造られています。

最盛期の1989（平成元）年には国内の生産量は約13億足でありましたが女子高生のルーズソックスの流行、生足なまあし（靴下を履かない）ブーム、ジーンズ・スラックスの流行等によりストッキングの市場が急速に縮小しつつある時に、1998（平成10）年定年を迎えました。



縫製機「ラインクローザー」前（左が筆者）

ストッキングの変遷の背景には科学の発達、時代の潮流、ファッションの変化等が複雑に絡み合っており、コストダウンと新商品開発をキーワードに原材料や機械設備関係が飛躍的に開発・進化を遂げました。特に、コストダウンの追及で編機の高速度・多口化、工程と作業の省略化・連続化・自動化が急速に進展しました。また、商品の成長期には市場が拡大し収益向上の期待が持てれば多くの企業が参入し各社競って新素材・新生産設備・新加工方法等の提案・提供・サービスを受けられることも体験しました。更に、衣料品や食料品のような身近な商品は何かの切っ掛け・仕掛けがあると爆発的に需要を喚起できる大変興味深い事業であることも実感しました。

丁度、会社のシームレス靴下への転換時期に入社し、ストッキングの変遷とともにパンストの全盛期を体験し、市場縮小とともに退職したことになり「女性のファッション商品と共に歩んだ」ことは貴重な経験であり、いろいろな職場で一緒に仕事をし、苦楽を共にした上司・仲間の皆様に感謝し誇りに想っています。しかも、戦後商品の「コストダウンの優等生は卵とパンスト」と言われているように、熾烈なコスト競争と新商品開発競争の業界の中で生き抜いて仕事に携われたことは大変、幸運だったと思っています。

「歴史は繰り返す」という言葉がありますが、長い冬の時代が終わり、最近のストッキングの国内生産量がピーク時の約十分の一に回復して、業界が再び元気を取り戻しつつあるようで喜びに堪えません。

3. ナノって何ナノ？

伊東 巖（工化 S40）

銀のナノ粒子の製造技術は40年ほど前から研究され、真空中で銀の蒸気を捕捉する所謂CVD法による製法が採られていたが、この方法では精々数10g/Bat程度しか生産できず、用途としては主にメモリーやCPUなど

に使われる、ナノテクの世界での話であった。

ところが、10数年前に硝酸銀の水溶液に炭酸を加えて炭酸銀にした後、加熱して炭酸根を外してナノ粒子を得る方法が提案されてkg/Batスケールでの生産が可能となり、更に5年前にシュウ酸の銀キレートから作る方法で製造コストが数百円/gまで下がった。

この様に新しい製法が次々と開発されることにより、銀のナノ粒子はナノテクでの応用から、一般産業素材への応用と言う所謂、バルクでの使用の可能性が出て来た。とは言え、現在までは、ナノ粒子を如何に安く造るかに研究の主眼が置かれて来たため、ナノ粒子が如何なる性質を有し、どのような特徴を生かした製品が可能かなどの、応用面での研究は殆ど手つかずの状態にあると言える。

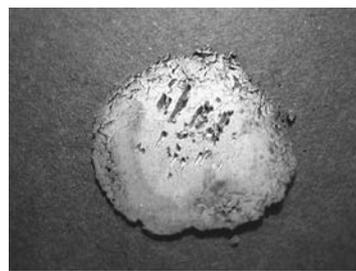
金属のナノ粒子は、その膨大なる比表面積を有していることに由来して、その金属が持っている固有の融点の遥か低温で熔融焼結して元の金属に戻る。即ち、200℃以下の低温で熔融焼結して、焼結後は元の高い融点に戻る。この性質を産業素材として利用しようとしたのが接合材としての応用である。ところが、この凝集現象は粒子同士のごく近傍で、しかも瞬時にしか起きず、半田の様に熔融が次々と伝播して全体を液状化・固化することはない。そのことがネックとなり、未だ実用化には至っていないのが現状である。

最近になって、この低温焼結現象が単なる膨大な比表面積に由来するのではなく、ナノ粒子の原子としての性質に由来していることが分かってきた。即ち、首都大学東京の春田教授の話では、2nmの金のナノ粒子は全ての面が金の原子で覆われており、全体が原子としての挙動を示すとのことである。1nmは10Åであり、金の原子間距離をほぼ2Åとすると、2nmの金のナノ粒子では、金原子が直径方向に10個並んでいるに過ぎない。

我々は5nmの銀のナノ粒子を使っているが、最近、Bi・Snの合金に銀のナノ粒子をある特定の比率で混ぜて、均一な混合系を構成した後、200℃で熱処理したところ、金属光沢を有して、しかも1000℃以上の耐熱性を持った焼結体が得られた。この金属はX線で構造解析した結果、Bi・Sn/Agの金属間化合物であることが分かった。即ち、200℃と言うごく低温で銀が金属反応を起こし、別の合金を作っていたのである。

一般に冶金の世界では金属を熔融状態で反応させることが条件であり、そのために1000℃以上の高温に加熱熔融することが常識とされていたが、金属をナノ粒子化することにより、極めて低温で、しかも完全に制御され

た反応場を確保することが可能になり、新しい冶金技術として、新たな可能性が生まれた。この低温での金属反応は今回初めて見つけた全く新しい現象であり、今後の発展が大いに期待できる。誰か志のある研究者が新しい講座を立ち上げてくれると嬉しいのだが。



200℃で作った金属

以上

4. 家庭園芸のすすめ ～思えば遠くへ来たもんだ～

肥土 邦彦 (農 S48)

今、イギリスへ向かう飛行機の中でこの原稿を書いています。イングリッシュガーデンを訪ねる旅です。10年以上前からヨーロッパなどの庭巡りをしています。今回はスタアヘッド庭園やブレナムパレスの庭園を訪ねる予定です。

私は、農学科肥料学研究室の出身です。卒業後は東京都に入り、行政職を経て東京都農業試験場に移り、野菜栽培の研究に従事しました。2年ほどで農業試験場江戸川分場に移動、花卉栽培の研究に従事するようになりました。江戸川分場は、周囲に栽培農家をかかえているものの、出先機関ということもあり、研究設備、予算とも十分なものではありませんでした。こうした状況下でどのような研究テーマを選んだらよいか悩んでいるときに、先輩からヨーロッパ旅行に誘われました。ドイツ、オランダなどの試験場、農場などを訪ねる旅でした。何らかの参考になればと参加することにしました。訪問した試験場では、最先端の栽培技術研究の他に品種比較試験が行われていました。これは研究とはいえなにかもしれないが、栽培データは農家にとって貴重なものになると思われました。

帰国後この品種比較は、私の重要なテーマのひとつになりました。タネを種苗会社から提供してもらい、多くの品種を栽培し、それを栽培農家に直接見てもらい、品種選択の参考にしてもらおうのです。多くの植物の多数の品種を栽培することにより、様々な問題点が見えてくることもあり、新しい研究テーマになりました。さらに試験場が地域サービスとして行っていた市民のための園芸教室の受講者にも見てもらい、一般消費者の嗜好調査も



デビット・オースチンバラ園

行いました。こうしたデータは、これまであまりなかったので栽培農家に喜ばれました。

その後園芸専門学校、東京農大短期大学部などで若い人たちと係る機会が得られました。また雑誌やテレビを通じて一般消費者向けの普及啓蒙活動を行う機会も得られました。

ちょうどこの頃ガーデニングブームが起

き、家庭園芸が注目されるようになりました。しかしこのガーデニングブーム、園芸業界内部からのものではありませんでした。外部からの仕掛けでした。栽培よりも装飾が中心のものでした。中心になった人たちもデザイナーなどの人たちで、植物栽培にあまり関係のない人たちでした。植物栽培の楽しみを追求するはずの家庭園芸が、いつのまにか装飾のためのものとなってしまったようです。このためかガーデニングブーム、単なるブームで終わってしまいました。

東京農大の勉強会で種苗会社の育種方針などについて聞いたことがあります。担当者が種々お話しくださったのですが、エンドユーザーについての言及はありませんでした。直接の販売先である栽培農家についてだけでした。

川上から川下までという言葉があります。園芸でいえば、基礎研究、生産から一般消費者行動までということだと思います。これまでは、この一番肝心なエンドユーザーである消費者、家庭園芸が忘れられてしまっていたと思います。この家庭園芸について今一度考えてみる必要があると思います。

現在は年1回ほどのペースで園芸の本場イギリスなどの庭園を巡る旅をしています。イギリスの事例をそのまま日本に当てはめることはできませんが、その心意気は相通じるところがあります。かつてイギリス人から「園芸に適した人間が2ついる。イギリス人と日本人である」と聞いたことがあります。

家庭園芸の原点に帰らなければ、園芸の発展はないと思います。大学時代の肥料学専攻から家庭園芸という縁遠いものになってしまいました。

5. 環境版「インタープリター」の勧め

大塚 昇 (化工 S49)

私は練馬区で環境保全等の業務を中心に公務員生活を36年間務め、今や定年退職して5年目となった。そんな現役時代の後半期に関わった環境に関する所感を、ここで語らせていただきたい。

まずは総合的な環境の指標について。「名水100選」「音名所100選」…、ご記憶にあるだろうか？こう並べると環境庁があった時代に遡る。住民と自治体の推薦を得て、これらは皆で選定された。環境に関心を持ってもらうことには、効果があったであろうと思われる事例である。

最近では、私たちの住んでいる身の周りの生物が、環境の代表的な指標となりうるのではないかとされている。環境省をはじめ、生物による環境調査が、多くの自治体で取り込まれるようになった。私は、生物そのものよりも、「生物が生息している環境」を調べ、記録するほうがふさわしいと思っているのだが。私が過ごした練馬区発で『いきものつながり』（2011年3月、「練馬いきものつながり」制作、文一総合出版）という本がある。この精神“生きもの目線”で、地域やまち、みどりを見てみようと呼びかけるものであった。

環境を数字で表現しようとすると、なかなか分かりにくいという声が多く聞かれる。1960年代から環境現象を表現する方法の一つとして使われる「PPM」。本来は百万分の一であるところの μ （マイクロ）であるが、微小な物質の解析をする数字としては一般人がすぐ理解できるか、疑問は残る。

以前、石原元都知事がジーゼル排ガスの黒煙となる物質をペットボトルに入れて、振りながら分かりやすく説明していた。視覚的には理解しやすい環境現象の表現であった。まさに「数字で空気を読む」ではなく、「空気を看る？」ことに、努力が払われた表れであった。

最後に、環境に関わった技術者の視線で私の所感をまとめてみたい。理工学系大学の卒業生は、皆、技術者としての役割を遂行してきたとの自負があると思われるが、巷では、その技術が継承できていない、後継者がいない、という声を耳にする。マニュアルを作成して、それに従ってやってくださいと言っても、無理な話で、そこに工夫の余地がなければ、また、蓄積による経験則が獲得し得ていなければ、継続することは困難である。

では、どうすればよいのか。技術者より、技能者・職

人を目指すというのはどうであろうか。技能者や職人という、結局人について回るので、よけい継承は困難な面を想像しがちである。マニュアルを参照し、目前の問題を片づけながら、その経験に基づいて技術を蓄積しつつ、長期展望を見据えて物事に当たる。そこには、感覚から得たビジョンを科学的に分かりやすく説明できるインタープリターの活躍の場があるように思える。よく、現場を知らないということが言われるが、逆に現場からの提案がどしどし出てくるのが、健全な仕事の遂行になるような気がするのだが。



6. ブリヂストンに入社して担当した技術開発

西川 智久 (織高院 S61)

1986年に東京農工大学繊維高分子工学科-宮田研究室を修了し、ブリヂストン(以下BS)に入社。当時、

宮田研究室からは1985年までに7名が入社していた。

以下にBSで私が、開発に従事した項目を簡単に列挙する。

1. 1986年～、入社し繊維開発部に配属。繊維メーカーが開発した強度が10%以上向上した66ナイロン(Ny)の開発。通常の接着処理(Dip)では、強度が10%以上低下するため強度メリットを出せなかった。その為に、新Dip法・新Dip液を開発。これらの技術を用いて製品化に結びつき、新繊維は飛行機用タイヤに採用された。(ボーイング747用の飛行機に初のラジアル新構造+有機繊維ベルト。)
2. 1988年～、BSがファイヤーストーン(FS)買収により米PET繊維工場を支援。(日本の繊維メーカーの技術支援を受けて。)従来のPET繊維だけではなく、タイヤメーカーが考えるコードの開発に着手。分子設計-重合-紡糸-延伸(機械系の管理職と一緒に改造含め各装置を購入)。更に3次元共重合体PETの開発へ着手。高分子合成は始めてで、試行錯誤の連続。東京農工大学・東京工業大学・東京理科大学の各教授に指導して頂いた。このFS買収により世界3大タイヤメーカーになった。
3. 1992年～、スタッドレスタイヤ(ある程度の雪道でも走行できるタイヤ)の新規開発。短繊維を配合した発泡ゴムを開発。自主的に3部署共同(タイヤ研究部・材料開発部・繊維開発部)で開発に着手。

分に1号機が爆発しました。あれだけの爆発でもピークの形状に影響を与えていないことが分かります。

原子炉の運転で絶対に防がねばならないものとして制御されない臨界と燃料溶解がありますが、東電や原子力安全委員会(当時)が臨界について検討した話は聞いていません。

3月13日、私は臨界が起きている可能性があるとして臨界の直接証拠はないか探しました。そしてI・132(半減期2.3時間)の濃度がI・131(同8日)のそれを上回っているとの情報を得、可能性が確信に変わりました。ではどこが臨界か?

炉停止後、臨界が問題となるのは使用済燃料プールのみです。実は使用済燃料プールの構成は①水遮蔽がある、②水の存在下で有効な中性子吸収板が挿入されている、の2点を除けば原子炉と同じなのです。プール水が沸騰すればそれら違いがなくなり、裸の原子炉へ変身する危険性を秘めているといつてよいでしょう。

1号機が爆発する前、プールの温度が83℃との報告がありました。東電が問題視した様子はありませんでした。ポンプ停止で循環が止まっていることからプール壁温が83℃であれば中央は沸騰しているだろうとの発想はなかったようです。

図のピークは1号機プールの臨界を捉えたものと考えております。大気圧下で臨界になったことにより、強烈な放射線が水を放射線分解、生じた水素と酸素の混合ガスがプールのある部屋に充満、引火、爆発したとすればこのピークの出現、爆発のタイミング、被害状況(オペレーションフロアより上のみが吹き飛ばされている)等を矛盾なく説明することができません。同じ原因で炉心に燃料のない4号機も爆発の可能性があると指摘しましたが、結果はご存知のとおり。

紙面の都合上ここで止めますが、東電の説明のほころびはまだ山ほどあり、プールでの臨界を仮定すればほとんど全ての事象を説明できることを申し添えておきます。

世界の人口は70億人でさらに増え続け、地球温暖化が急速に進行している現在、原子力を除外した解決法はあり得ないと確信している私ですが、矛盾だらけの原因説明で一件落着としている当事者、今回の爆発と関係のない活断層を目玉に存在感をアピールしている原子力規制委員会の対応を見るにつけ、はたして日本はこの巨大なエネルギーを制御、運営する資格があるのだろうかと思うこのごろです。

原子力村隠居人より

V. 趣味を楽しむ

1. 庭にある樹木達

齋藤 道雄 (農工 S26)

私は東京・大森の出身で、中学2年の昭和20年5月、B29の空襲で家を焼かれ、焼跡にバラックを建て一家で暮らしたが、大変な食料難の為、敷地の一部50坪程を焼土と下の土地を反転し、畝にして野菜、高リャン、陸稲等を作った事から、庭作り、野菜作り、更には庭に色々な樹木にも興味をもってきた。道路会社に就職し、北海道を初め、全国各地を転勤・出張して来て、各地の草花、野菜、樹木にも関心を持って回って来た。

自宅の土地も100坪は欲しいと考え、札幌郊外の今の土地を40代で購入し、定年後、この土地に家を建て、庭は自己流で作り、現在に至っている。

まず、庭木については、北海道の常緑樹は暗い色が多いので、全部を落葉樹にして、冬の日当たりも良く、春の新緑、秋の紅葉、大半は花が咲く樹にした。落ち葉は堆肥にして畝にも使える為、四角の土地の道路に面した南側西側に境界より15m内側に植え、落ち葉が大半は敷地に落ちる様にした。草花、小樹木、野菜も太陽が当たる明るい庭とした。樹は西側、南側に適当な間隔で並んでいる。

- ・レンギョウ (黄色の花が春早く密生する)、
- ・夏椿 (沙羅、夏に白い椿様な花が咲く)、
- ・ムクゲ (3本、夏に白、紫、三色の花が咲く)、
- ・空木 (ツカサは夏に白い花が咲く、梅花は白い梅のような花、姫はピンクの花)、
- ・白山吹 (花は4弁白花、山吹で種が出来る)、
- ・花カイドウ (桜に似た花で、ピンク色が濃い)、
- ・サンシュ (春早くボンボリのような黄色の花)、
- ・キングサリー (金鎖、黄色の藤状の花房が垂れ下がって咲く)、
- ・恵山ツツジ (恵山が産地、赤い花が咲く)、
- ・サラサドウダン (ドウダン的一种、2mになる)、
- ・ライラック (リラの花の木)、
- ・赤城ツツジ (薄ピンクの花、春早く咲く)、
- ・マユミ (下向きの赤い花、赤い実が成る)、
- ・サツキ (3本あり、色は別々)、

以上、羅列したが、この外、ボケ、モミジ等10数本が散在しており、下の地面には白スミレを主体に日本サクラ草、白根葵等が一面に混在している。

これらを書いている5月中旬はハナカイドウ、レンギョウ、恵山ツツジ、クロフネツツジ、ボケや白スミレ、水仙多種、ムスカリ、チューリップ等が咲いている。新緑に覆われ、心休まる時を過ごしている。なお、畑の方はやっと、種が撒ける気温になって来たので、近々、始めたい。

最後に、季節がはっきりした札幌に住んで、季節、季節で楽しく老後を過ごしている。

2. 団栗と戯れること

橋本 裕 (林産 S47)

大学卒業後42年が経ち、会社生活にピリオドを打って、ようやく第2の人生を謳歌するスタートラインに付けたと思いきや、何のことはない、現役中にあれもしたい、これもしたいと楽しく思い描いていた夢や希望の大半は、実生活と周辺環境の制約の中、あえなく挫折してしまいました。

世の中のサラリーマン卒業生の大半は、こんなものだろうかと、自分を慰めつつしばらく安逸の日々を送っていましたが、ある日突然、このままではまげ老人になる日も近いのではないかとの確信めいた恐怖感に襲われました。

あれこれ考えているうち、中学生のころ、近くの造成地や貝塚跡の畑地などで、仲間とよく土器片や石鏃、石斧などを拾って自慢しあったことを思い出しました。

その頃の影響か、学生時代から縄文時代の生活に興味があり、結構縄文関係の本を買って読んでいました。

その中で、採集社会であった縄文時代の食、特にデンプン質の摂取には、団栗が主役を担っていたことに、関心を持っていました。(クリも、三内丸山遺跡等では、大々的に栽培されていた)

考えてみると、元手いらずで、公園、街路樹、2次林で簡単に手に入る団栗を利用して、樹種毎に団栗を採取し、資料と照らし合わせながら、いろいろ試みるのも面白いだろうかと、昨夏から少しずつ勉強を始めました。

去年は、アクの強いコナラ、シラカシを水に晒してア



ク抜きし、紛にして煮てコンニャク状にしたり、ホットケーキに混ぜて焼いてみました。コナラ属（カシ、ナラ類）の団栗は、資料と照らし合わせながら、アク抜きをし、粉にして調理、試食してみました。渋みが残っていて旨いものではありませんでした。次回は、アク抜き法の工夫が必要です。

一方、アクのほぼ無いスダジイ、マテバシイは、炒って食べたり、殻をむいて水に漬けて少し柔らかくし、ごはん炊き込んでシイご飯やシイを粗くつぶしてクッキー生地練り込みシイクッキーを作りました。これは結構おいしいものでした。

しかしながら、これらの試食を、家内や子供たちに持ちかけても、誰も食べませんでした。

それでも、根性でもう一年団栗について調べようと、暇を見つけては、今もあちこち歩き回っています。

まあ、団栗を調べている間に、生涯大学校に入り仲間ができ、剣道の道場にも通い、アルバイトをして、旧知と酒を酌み交わすと、結構多忙な日々を送っています。気力、体力、知力の衰えにやや歯止めがかかりつつあるので、今後これをできるだけ長く維持する努力をしながら、第2の人生を楽しむこととしたいと考えています。

3. 還暦準備の思わぬ収穫

照井 俊 (織高 S52)

昨年、還暦を迎えました。

還暦を迎えたとは言っても、引退して悠々自適の生活というわけにもいかず、いまだにせせせと働いておりますが、50台の半ば頃から、還暦後の準備はしておりました。はい、無趣味かつ遊び友達もなく過ごしてきた我が身を振り返り、引退後の寂しさを恐れ、趣味作り、遊び友達作りを計画したのです。とは言っても、心構えばかりで、数年前までは、何一つ積極的な行動は起こりませんでした。

それは突然にやってきました。若い頃に少しばかり楽しんだスキーに誘われ、まあ怪我をしない程度にと日帰りでお付き合いさせて頂き、そろそろ帰宅の時間も迫ってきた頃合いのとき、気の緩みか、大転倒をしてくしたのです。ええ、大転倒です。というか、大回転です。何がどうなったのか、体が宙を舞い、頭から落下したのです。そのとき、『あっ、(人生が) 終わった』と思いました。『何を言ってるんだ、たかがその程度で、そう安々と(人生が) 終わったなんて感じるものじゃない!』と、経験豊富な諸兄にはお怒りの方もおられることと思いますが、えへん、私だって余命宣告を受けたことがあるのですぞ(幸いに、寛解しましたが)! その私が言うんだから間違いない。しかし、結果的には、何事もなかったわけです。



とはいえ、そこにいる自分は、転倒前の自分ではなかった……何故か、スキーにはまってしまった自分が居たのです。理由は聞かないで! 理屈抜きで『ああ、そうなの』と受け入れて下さい。理屈をこねて突っ込むのは、理系の悪い癖ですぞ。

さて、スキーにはまった私は、スキー命に変身を遂げました。僅かな貯金を切り崩し、あまつさえ、娘の結婚資金までも切り崩して、引退後のスキー三昧生活の準備に取り掛かったのです。まずは、家内を同好の人にする。これは実に容易で、子供達まで巻き込むことに成功しました。次は、拠点作りと移動手段の確保。某スキー場にスキー用のリゾートマンションを購入、雪国用の4WDも購入しました。ちなみに、お金の余裕なんてないですよ。やりくり上手の家内のお陰です。そうそう、スキー用のリゾートマンション購入は慎重にね。購入価額はびっくりするほど安いけど、維持費はびっくりするほど高くなりますよ! 絶対にお勧めできませんけど、それでも買うつもりには、ご相談下さいね! 止めて差し上げます。さらには、海外スキー宣言。これは周りが慌てた。なんせ、ほぼ初心者がいきなりカナダで滑るんだなんて言い出したのだから。

そして、スキーにはまってから、準備を整え、いよいよ迎えた最初のシーズン。

私は予備校の講師をしておりますので、冬期講習会なるものが終わるまでは、月～金曜の空き時間はおろか、土日の暇もありません。これが、遊び友達が極めて少ない理由でもあるわけです。そうそう、この場を借りてお願いしておこう。同期の諸君、たまには金曜日の夜ではなく、土日の夜に集まっておくれよ。さて、話を戻します。冬期講習が終わっても、仕事は続くのですが、この辺りになると、事前に不義理を宣告しておけば、それなりの休みを取れるのです……我が儘い放題の我らおじいちゃん講師はね。はい、最初のシーズンにして、延べで5、6週間はスキー場に入り浸ったのです。

一番大きな収穫は、家内との関係でした。我が家はどちらかと言えば、仲が良いと評判の夫婦、定年で離婚を切り出される方もおられるようですが、ご事情も知らないのに、情けない輩もいるものだと思っていたのです。ところが、かくいう私もご同輩だったのです。私にとっての家内は、愛しいけれど居てくれて当たり前存在になってしまっていて、家内から与えてもらうだけの形になっていたのです。スキー場で過ごした日々、家内は子供達や親からも切り離され、家事も必須ではなくなり、私は私で自分の時間を家内と共有する余裕が生まれ、二人だけの、そして、二人揃ってスキーを楽しむ日々を送ったのです。家内の久々に見る、若々しい行動や仕草、いつもにも増しての屈託のない笑顔、一日中交わす会話……ああ、長い間、こんなにも僕は家内を見ていなかった、こんなにも家内と会話していなかった。僕の時間を少しも与えてこなかった。それに気が付いたとき、愕然とし、間に合ったことをあの「大転倒」に感謝しました。

駄文をお読み下さって、ご感想は？時間があっていいなあ……ですか。ははは、スキー場に入り浸ったとは言いましたが、仕事から解放されたとは言っていないよ。「原稿書き」という仕事はあり、「締め切り」という善意の悪魔に追い続けられていたのです。

そうそう、遊び友達のことですが、これも大成功です。が、紙面も残り少ないようですから、それはまたいずれ。気が向いたら、Facebookでも検索して下さいね。

4. 銭湯との縁

～時に癒され、時に働き～

弦間 悠造 (MOT H24)

私は銭湯をはじめ、大きな浴場が好きである。近所の銭湯に行き一週間の疲れを癒やすことが私の週末楽し

みになっている。湯に疲れがにじみ出るような感覚が非常に心地よい。時間さえあればゆっくりと浸かって帰宅後ぐっすり寝る。至福の時間である。

普段、1週間も働けば身体的な疲労感がどっと溜まってくる。また社内の配属先が変わり、新しい部署での経験が短い上以前の配属先と関連が少ないため、2012年度に入社して社会人3年目にも関わらず未だにわからないことだらけで非常に歯痒い思いをしている。そこで週末に心身ともにリフレッシュするのである。

思えば、私は幼少期より銭湯に行く機会があり、よく親しんでいた事もあって大浴場が好きなものかもしれない。今では珍しいが母方の実家には風呂がなかった。オンボロの家屋で、平成の時代にあつてトイレはくみ取り式、電話は回転ダイヤル式（いわゆる黒電話）、という状況を鑑みれば風呂がないことくらいは納得できる。そのため母方の実家に行ったら銭湯に行くことは常であったが、年1回訪れる程度だったので広い風呂に入るといふ特別感が好きになった理由なのかもしれない。

そんな私が大学院時代に銭湯掃除のアルバイトをするようになったのはきっと何かの縁だろう。きっかけは私の所属する研究室の先輩が修了されるため、アルバイトの穴埋めとしてたまたま声をかけて頂いた。今どき銭湯なんて珍しいと感じたが、その掃除をさせてもらえとは思っていなかったの、めったに経験できることではないと思い二つ返事で始めさせて頂いた。

アルバイト先の銭湯は小金井公園の北、田無高校の先にある。ご夫婦とご主人の母の3人で経営されており、非常に親切で優しい人柄であった。そんな人柄の良さがお客さんに届いているのだろう、今どき銭湯と言いつつもかなり入浴客が多かったようである。

その銭湯でアルバイトをしていると、母方の実家に行った際よく行った銭湯に貼ってあったポスターと同じものが貼ってあった。販促用ポスターで、どこかのオフィスの窓から銭湯が写っているような構図である。銭湯の方に伺ったところ驚いたことにアルバイト先の銭湯がモデルになっているのだという。比較的銭湯等の公衆浴場で見かけるポスターだったので良く記憶していたが、モデルが存在し、その銭湯で働くことになるとは…縁は異なるものである。

さて、私がこういった心情を本稿に投稿させて頂いたが、普段こういった心情を文章に表すことなど無いので、頭を捻って一仕事終えた気分になる。仕事を頂いたおかげで今宵の銭湯も気持ちよく浸かれそうである。末尾ながら感謝の意を申し上げる。

VI. あの地この地

VI-1 素敵な国々

1. カンボジアへ同級生との珍道中

市瀬（村田）和繁（織高 S52）

一年に30回以上海外に出向き、然も今回は同級生との旅行と言うことで、時期も3月31日出発4月5日帰国と年度末の大変な時期、新入生の上社時と会社を運営する小生としては、非常に心苦しく、後ろ髪惹かれる思いで、信州・飯田の地を後に出発していきました。

+++カンボジアはビザが必要です。日本で取得した方が良くと……、サム君のアドバイス。夜中の到着の際、問題を起こさないようにとの事!!

時差は2時間ですが、飯田を出発してから（朝5:00）ソウル仁川空港でトランジット、東京組と合流してシュリム・アップ到着が23:30と言うことは、約20時間以上掛かってのカンボジア到着です。何故シュリム・アップ?と私も思いましたが、この空港が世界遺産の「アンコール・トム」「アンコール・ワット」への入り口と聞いて何も知らない自分を恥、個人旅行の計画性の無さを猛反省し友人の旅行雑誌に目を通した次第です。→皆さん経験がおありでしょう。

農工大の「櫛寮」位の大きさのこじんまりした空港で、入国審査も全く待たず手荷物検査もドキドキする事無く、車で市内へ移動、其のままホテルチェックイン。

翌日はアンコール・トムの見学。気温は40度を越す暑さで日差しも強くサングラス帽子は必要でしょう。入場券は自分の顔を写真で撮りそれが「通行手形」この証明書に挟を入れて入場の証明になります。食事とても美味しく果物の“マンゴ”の美味しいこと、それに安い!安い!昼はU\$2,00位、因みに通貨は米ドル、おつりは現地通貨。皆さんドルの大きい額は持っていかないこと!!（100ドル札なんかは持って行かない）昼でも、一杯飲んで、目一杯食べて、昼から2時間ぐらい‘ハンモック’で就寝時間が止まっている位ゆっくり生活が流れて、米は一年間に3~4回（水耕栽培）も取れ、果物は豊富、着るものはT-シャツ、短パン、スリッパと生活するのにお金が掛からな



い。裕福な国です。一日の最低賃金U\$3,00、したがって労働意欲も余り無く<マー働いてやるか>位の雰囲気です。セコセコしていないし、お互いの牽制もしない。非常に穏やかな国民性で、何故マスコミで報道されるような暴動、ストライキが起こったかは信じがたい。



翌日はアンコール・ワットの遺跡見学、映画に出てくるガジュマルの木に押しつぶされそうな遺跡、昼は湖のほとりで、京都にある「川床料理」のような雰囲気??の「床上料理」（私の個人的な命名）手作りマンゴの前菜、なまずの塩焼き、蛙の開き等珍しい現地の食べ物、ご飯もてんこ盛り。。。

例によってハンモックでの“昼寝”最高でしょう。夜はフランス風の建物の中で現地の踊り見物、ナイトマーケットでの買い物…マー、ネタは尽きないね!!

翌日は、朝からタクシーをチャーターして（運転手込み55ドル）カンボジアの首都プノンペンへ300km、約8時間かけての移動、国道一号線をひたすら南下5月からは雨季ということで、今は赤茶けた道路、舗装はしているものの、禿げ、埃だらけ、何とかインフラ整備……と思わず叫びたくなる光景です。

プノンペンのホテルではカンボジア料理をホテルのオーナーが招待してくれ次の日も中華料理をご馳走になりました。今、隣に新しいホテル（ハーモニーホテル）建築中、今頃OPENしているでしょうが、屋上にプール付き、眺めは360度、王宮もメコン川もマー

ケットも眼下に見え 是非皆さん、サム君にお願いしてホテルのリザーブをしてはいかががでしょうか？

最終日はリバーサイドでフランス料理のフルコース（約20ドル）堪能しました。と言っても勉強も怠っては居ませんよ！！プノンペン経済開発区での工場視察、市内の金融市場の視察、市場で買い物の“値切り”何れにせよ、とても魅力の有る国、経済援助の必要な国、学校教育が必要であり、そっとしておいて置きたい国でしょう。初めてのカンボジア旅行……各自、心に残る旅であったと思います。

サム君アテンド有難う、現地地のやさしい人たち他の国に毒されないように！

又、今年私は再度伺う予定です。一緒に行った皆さん是非又行きましょう！！

2. 赤道直下より

谷本 哲朗（環・資 H6）

卒業して早20年経とうとしております。林野庁に奉職以来、仕事柄、全国を転々と回っておりましたが、平成25年の6月より縁あってインドネシアのカリマンタン島（ボルネオ島）で仕事をする機会に恵まれました。カリマンタンという



赤道記念碑

と、はるか遠くの国のジャングルを思い浮かべる方も多いかと思えます。私の限られた経験からではありますが、ASEANの盟主国的存在であり、豊富な資源を有し、伸び盛りのこの国の紹介をさせて頂ければと思います。

基礎的な情報からいきますと、インドネシア共和国は人口が約2億5千万人（日本のおよそ倍）で、1万数千の島から成り立つ島国です（ちなみに私のいるカリマンタン島は、面積でいくと、これまた日本の国土のほぼ倍に匹敵する大きさで、世界で3番目に大きな島とのこと）。国民の平均年齢は20代後半ということで、高齢化の進む日本から比べると羨ましくなる若いエネルギーと可能性を持った国です。

インドネシアは国民の9割超がムスリムである世界最大のイスラム教徒を抱える国ですが、一方、他の



オイルパーム農園造成風景

宗教（キリスト教、仏教など）の信仰も国として認めています。国の祝日も、それぞれの宗教に関連した記念日が設定されており、その辺りの多

様性を受け入れるお国柄からなのか、性格はおおらかで人懐っこい人が多く、日本にいたときのイスラム教徒に対するイメージはかなり変わりました。

私の住む西カリマンタン州の州都ポンティアナックは人口約50万人。多民族国家であるインドネシアの中で華人が多いのが特徴といえます。まさに赤道直下に位置した街として、街中には「赤道記念碑」なるモニュメントが建っており、北半球と南半球をまたぐことができます。

そもそも私の仕事は、気候変動対策の一つとして、途上国での森林保全を図るうえで有効と考えられている「REDD+」という取り組みを推進するため、地方政府の能力強化や仕組みづくりをお手伝いする、といったものです。当地の森林減少の原因としては、違法伐採や森林火災といったことに加え、プランテーションへの転換も大きいインパクトを与えています。特にオイルパーム（食用油や洗剤などに利用。インドネシアは世界最大の生産国）農園の造成は至る所で行われており、見渡す限りの広大な土地がオイルパーム農園に転換されている光景には圧倒されるとともに、成長を続けるこの国の変化がもたらす影響を考えずにはられません。残された森林を如何に効果的に保全していけるのか、微力ながら貢献しつつ両国の友好に携わっていければと思っています。

なお、余談ですが、うちの職場はもともと農工大出身者が多いのですが、現在の業務（海外林業協力）に携わるようになり、仕事上接点のある方（担当課長補佐であったり、関係団体の技術者の方であったり）の多くがまた農工大OBだったことに驚きを感じた次第です。その中には在学中にお世話になった方もおり、仕事を進める上で非常に心強く感じたことも



太陽が真上で影が消える

に、一方で、(自分はさておき)うちの学校はそんなに海外で活躍する人を輩出するようなグローバルな校風だったのかしらん、と思わずにはいられませんでした。とりとめのない駄文ではありますが、これを機会にインドネシアに関心を持っていただければ幸いです。

3. 世界一暑い国から

村瀬 美美 (地生 H20)

2014年1月から青年海外協力隊の林業・森林保全隊員として、東アフリカのジブチ共和国にきています。ジブチ共和国は、アフリカの角と呼ばれる北東アフリカに位置する小さな国です。面積23.2万km²(四国の約1.2倍)、人口約85万人で、紅海に面しています。周りを政情不安な国に囲まれ、そしてこれと言って目立った産業がなく外国の援助に頼っている国ですが、生活してみると至って平穩に暮らせています。

公用語であるフランス語、アラビア語に加え現地語、英語、エチオピア語など多数の言語が飛び交う中で多民族が生活を共にしており、遠い昔に習った「人種のるつぼ」という言葉が記憶の彼方から呼び起されます。1日5回アザーン(コーラン)が町中に響くイスラム圏でありながら、女性も男性と同じように働くことができたり、女性はカラフルな布で頭を隠していたりと文化的にもアラブ系の影響を大きく受けながらも、どこかアフリカの陽気さ、自由さをも有している不思議な国です。

活動先はジブチ共和国の首都であるジブチ市内です。町の人たちは好奇心旺盛で、外国人だと分かる中にはからかいもありますが、澄んだ瞳で「ニーハオ」「こんにちは」と盛んに挨拶してきます。そして、長い時間をかけて並んで買った自分のパンを分けてくれたり、現地語があまり話せないことが分かったと遠くまで通訳のできる人を呼びに行ってくれたり日々彼らの親切に助けられています。また、学校に行くことができないような子がなけなしのお小遣いでキャンディーを買って私にくれたり、街で知り合った人が、動く揺れるようなトタンでできた家に招待してくれ、60DJFのコーラと1つ10DJFの揚げ菓子(1DJF≒0.7円)でもてなしてくれたりもします。

物やお金は日本ほどないけれど、悩むことを知らずあっけらかんと笑い飛ばし、それでいて当たり前のよ

うに人に親切にできる心を持つ彼らを見てみると、本当に幸せ、特に精神的に幸せなのは、日本とジブチ、果たしてどちらだろうと考えさせられる毎日です。活動はまだまだこれからですが(この原稿が掲載される頃にはとうに1年が経過しようとしている時期だと思いますが)、3か月という短期間の中でも彼らから受けた親切に少しでもお返しができるように取り組んでいきたいと思えます。活動先は農業省の出先である農業試験場であり、苗木の生産や在庫管理、小学生などを対象にした環境教育の実施などに取り組む予定です。

平均気温が世界一暑いと言われるジブチ共和国では、最高気温が50度にも達します。人間にとってもまた植物にとっても過酷な状況です。2年という限られた時間の中で、何をどこまでできるのか、何を見つけるのか、そして何を残し何を持ち帰ることができるのか、貴重な経験をさせていただけることに感謝しながら、自分への挑戦が始まりました。

(和歌山県支部)

VI-2 魅力の日本

1. 八重山諸島への旅

鎌田 佳伸 (織工 S37)



齢74にして初めて石垣島を訪れ、八重山諸島の島巡りや釣りなどを楽しんだ。4月初めの10日間のステイである。出発の朝、流山の我が家から見える公園の桜は咲き誇っていた。石垣島に着くと、季節は初夏、落葉高木のデイゴの葉のほとんどが落ち、木全体が真っ赤なデイゴの花に覆われていた。入学式の花は、八重山では桜でなくデイゴであると聞き、南北に広がった日本を再認識した。ところで、「島唄」にも歌われているが、デイゴが見事に咲くと、天災に見舞われるという言い伝えがあるそうである。グローバル



日本最大のサキシマスオウの木

な環境変化、温暖化が進み、日本の四季も崩れつつある。また最近、フィリピンに甚大な被害をもたらしたスーパー台風という異常気象も起こった。今年の日ゴの花が天災に結び付かないことを祈る。

八重山諸島の中の石垣島、竹富島、小浜島、西表島、由布島、波照間島を巡った。これらの島々は珊瑚礁が隆起して出来た島であるという。石垣島や西表島には標高400m～500m級の山もあるが、これらも珊瑚礁で出来ているということであろう。

各島にはそれぞれの趣がある。共通していることは海の美しさである。遠浅の白砂と珊瑚礁の海岸が多く、水深と陽光によって海の色が変わる。特に石垣島の川平湾と波照間島の西の浜ビーチの景観が印象的であった。川平湾の景観は九十九島や松島を連想させた。

その他、西表島仲間川流域のマングローブ群生の原風景と板状の根を持つ日本最大のサキシマスオウの木(写真)、石垣島川平湾のグラスボートで見た種々の珊瑚と熱帯魚群、石垣島の珊瑚礁の鍾乳洞、など、見るべきところは極めて多かった。

食に関しても感ずるところがいろいろとあった。初めて遭遇した食の一つにアダンの新芽の天ぷらがあった。筍に似た食感で、筍より柔らかく筍より美味であった。アダンの実はヤシガニの好物とされているが人の食にはならないという。また、スナックパインというちぎって食べるパインに出会った。大変甘く美味でおもしろかった。なお、八重山そばは私にはもう一つであったが、石垣牛のすばらしさは噂通りであった。

小浜島や竹富島などには八重山みんさー、芭蕉布、藍染めなどの伝統的な織物がある。八重山みんさーの製織の見学に石垣島にある「みんさー工芸館」を訪ねたが休館のために見ることが出来なかった。まことに残念であったが次の機会に取っておくこととした。

光陰矢のごとし。農工大を卒業してから52年、定職を離れてから4年。今や旅行三昧の生活である。今回の旅では極めて天候にも恵まれ、のんびりした日々を過ごすことができた。また来年も行きたい旅であった。

2. 尾瀬と私の昔と今

石井 久雄 (林 S52)

卒業後、群馬県庁に就職し早37年。本年、定年を迎え退職しました。生まれは栃木県、育ちが埼玉県。私が群馬県に就職したのは在学中に初めて訪れた尾瀬に憧れたといえれば格好も良いのですが、第一次オイルショックの後の就職難で就職しやすそうなところを選んだというのが大きな理由でした。

69年安保闘争華やかかなりし年に高校に入り、浅間山荘事件のあった年は浪人生活、やっと大学に入った昭和48年は第一次オイルショックでトイレに入っても紙が無い、物価はどんどん上がり、公務員になっていた先輩はボーナスよりも年末に人事院勧告で給与が上がった分、4月に遡って支給される差額(今は給料が下がった分引かれる)の方が多いなって時代でした。

そういえば大学選びも、四大公害裁判や自然保護が社会問題となり国には環境庁、本学には環境保護学科ができるなどの社会背景に、なんとなく選んでしまった様な気がします。しかし入学後、初めて行った尾瀬は幻想世界の様で、すっかり魅せられてしまい、アルバイトで尾瀬のサブレンジャーも務めました。

当時、東京から尾瀬に行くには上野から夜行列車で沼田下車、バスで夜明け前に富士見下まで行って、ヨタカの鳴き声を聞きながら数時間歩いて富士見峠を越えて尾瀬ヶ原に行くのがメジャーなコース。重いキスリングを背負い、苦勞して着いた尾瀬ヶ原の美しさに感動したことを覚えています。余り勉強もせず4年間を過ごしてしまい、いざ就職となってしまいました。人に頭を下げるのが苦手だった私は、民間企業は向いてないと選んだのが公務員。そして、林業関係学部の無い群馬県が有利と考え、就職ということにおいては、尾瀬は二の次であったかもしれません。

大学、就職とはっきりした目標もなく進んでしまいましたが、紆余曲折はあったものの県庁生活最後の年に尾瀬にかかわる仕事ができただけにも因縁を感じます。無駄歩きばかりだった人生の節目毎に尾瀬とのかかわりがあった様に思います。

現在尾瀬では、初夏に湿原を黄色く染めるニッコウキスゲや夏が来れば思い出すミズバショウなどの植物がニホンジカの大規模な食害で見られなくなっています。公害や開発での自然破壊が心配された昭和の時代ですが、いまは異常に繁殖してしまった野

生鳥獣による生態系破壊が、自然保護の原点とされている尾瀬でも深刻化しています。職務でシカ対策に着手したところで退職となってしまったことが心残りですが、今後も尾瀬に関わって行きたいと考えています。

一時はオーバーユースが心配された入山者も、現在はピーク時の半分以下に減少しています。尾瀬ヶ原一面のニッコウキスゲは見られなくなってきましたが、四季を通じて魅力的な尾瀬に、是非皆様おかけください。

最後に尾瀬はもちろん日本中の山々を一緒に歩いた30年来の山友、昭和53年卒業の多胡輝久君の御冥福、紙面を借りて御祈ります。(合掌)

(群馬県支部)



3. まだまだ続く伊勢神宮の賑わい

古野 優 (獣医 S60)

農工通信84号で、伊勢神宮と式年遷宮の概要についてご紹介致しましたところ、沢山の方に御参拝頂き、誠にありがとうございました。現在はすっかり新しくなった光り輝く神宮となっています。新聞等では、平成25年の参拝者数が大きな話題となりました。

過去の記録によると、江戸時代には何度か大きなお蔭参りをする年があった様ですが、多い年で300～400万人となり当時の日本の人口の一角を越えています。

明治から大正時代は、100～200万人、太平洋戦争前は、500～800万人となり、終戦後しばらくは100万人、昭和30年は300万人、40年は500万人、以後遷宮年と翌年は800万人それ以外の年は600万人程度で推移していました。

今回の遷宮では、前年に803万人となり、平成25年は1000万人を越えるかも知れないと期待していました



新社殿



旧社殿

が、期待を大幅に上回り、日本の人口の一角を上回る1420万人もの人にお詣りをしていただきました。まるで江戸時代のお蔭参りの再来のようです。たくさんの方に、日本人の心の故郷として伊勢神宮にお詣りいただいたことは、地元の者として大変誇らしく思いました。

地元では、参拝していただくお客様に喜んでいただけるよう色々な工夫をしています。

内宮のみ参拝される方が増える傾向があったので、伊勢市駅前の外宮へ続く参道を整備し、赤福等の飲食店や土産物店の数を増やし参拝する方に楽しんでいただけるようにしました。

また、勾玉池のほとりに遷宮館を作り、遷宮の歴史、社殿造営(神明造)の紹介や御装束神宝の制作工程を解りやすく解説し、神宮や遷宮について理解を深めていただけるようにしました。

土日に交通渋滞が起こることが地元に住む者として唯一の困り事でしたが、最近では大分緩和されました。まだ、お越しになっていない方は、是非新しくなった伊勢神宮にお越し下さい。

また、熟年の皆さんは、次回の遷宮(2033年/平成45年)目指して頑張りましょう。(三重県支部)

福島の真実（いま）

高山伸之介 (地生 H11)



福幸支援隊の皆さん

東日本大震災と東京電力福島第一原子力発電所の事故から3年が経ちました。これまで、福島には農工大の先生及び学生の皆様が復興支援のプロジェクト等で入れられ、研究を続けていただいていることに対して、福島県職員として福島県民として厚く御礼申し上げます。
この文章が同窓会誌に掲載される頃には、すでに忘れられていることかもしれませんが、漫画「美味しんぼ」に掲載された「福島の実編」と題された内容は、我々、福島に暮らす者にとつて衝撃的な内容でした。聞いたことのない鼻血の話から始まり、「福島とりかえしのつかないまでに汚染された」「福島はもう住めない」など、これまで福島を挙げて取り組んでいる県産農産物の安全性のPRや風

評の払拭などの取組みが打ち消されかねず、偏った内容だと感じました。これをご覧になって同窓会の皆様は、どのようにお感じになりましたでしょうか。

私は、いわゆる「生産工」出身で、農業土木職として旧復興事業に携わっています。震災後、福島県と市町には、国、道府県からたくさんの方々の農業土木技術者の派遣をいただいています。我々は、皆様のことを「福幸（復興）支援隊」と呼んでいます。平成25年度までの数字になりますが、約1,000名の復興支援隊の皆様にご支援をいただき、ようやく県内各所で復興が少しずつ目に見える形となってきました。うれしいことに我々が農工大のOB、OGの方々にも多く駆けつけていただき、遠くは大分県から1年間という長期にわたるご支援をいただきました。改めて、福幸支援隊の皆様に対しまして、この場をお借りし、感謝申し上げます。

私は現在、沿岸部のいわき市で津波被害を受けた農地の再整備をおこなう基盤整備事業を担当しています。沿岸部の農地は、地震により40〜50cm近くも地盤沈下したために排水不良を生じ、耕作が出来なくなり、葎が2m以上繁茂している箇所があります。また、津波で運ばれたガレキや流木が残っている箇所もあります。これら多くの関門があります。今年度から本格的に工事に着手し、早期の完成を目指しているところです。受益者の皆さんは、このような困難な状況の中でも、地域農業や周辺環境を再生させようという前向きな気持ちを持っていて、逆にこちらが励まされ、背中を押していただいています。

最後に、東日本大震災と東京電力福島第一原子力発電所事故から完全に元の福島県に戻るまでは、まだまだ多くの時間が必要です。しかしながら、私たちは諦めていませんし、この福島から逃げようとも思っていない。今、福島に住んでいる皆さんの力と、多くの支援をいただいている全国の皆様のお借りしながら、必ずや元の美しい福島を取り戻します。これも一つの「福島の真実（いま）」です。

(福島県支部)

学科・専攻略記表

略記	学科・専攻名	略記	学科・専攻名	略記	学科・専攻名
農	農学科	織工	繊維工学科	環・資院	環境・資源学専攻
林産	林産学科	織高	繊維高分子工学科	織高院	繊維高分子工学専攻
環保	環境保護学科	化工	化学工学科	化工院	化学工学専攻
林	林学科	織化	繊維化学科	電情院	電子情報工学専攻
農工	農業土木学科 農業生産工学科	工化	工業化学科	MOT	技術リスクマネジメント専攻
獣医	獣医学科	機械	機械工学科	連農生	(博士) 生物生産科学専攻
応生	応用生物科学科	電情	電子情報工学科	工博生	(博士) 生命工学専攻
環・資	環境・資源学科	農化院	農芸化学専攻	工博電	(博士) 電子情報工学専攻
地生	地域生態システム学科	農工院	農業生産工学専攻		

千年少年 Sennen Shonen



1000年先の地球と語り合う、少年のような視点と、純粋な心。

地球という大きな星が与えてくれた
シンプルでピュアな贈物、

それは記憶の中の少年の目と
心にくっきりと映っている。

一杯の水、大地の実り、雨の恵みや、木の木陰・・・
地球がくれるシンプルな贈物について、
私たちは真面目に考えたいと思う。

壮大なプロジェクトの中に、高度な技術の結晶の中に。
千年先の地球と共に。



生命のめぐみ、永遠に

SC 株式会社三祐コンサルタンツ
Sanyu Consultants Inc.

本社 〒461-0002 名古屋市東区代官町35番16号
TEL(052)933-7801 FAX(052)933-7851
東京支社 札幌支店 仙台支店 岡山支店 九州支店

忘年会・新年会・歓送迎会・クラス会・謝恩会
PTA会合・周年行事・結婚披露宴・御法事

CATERING Service

出張料理

パーティ・御宴会は
サンクリアで!!

お集まりにふさわしい雰囲気演出致します。
お客様のご予算に応じたお料理お飲物を調整致します。



グラス～テーブルクロス等
あらゆる備品を用意し、
セッティングからサーバー
後片付けまですべて
おまかせ下さい。

府中グリーンプラザ内
府中駅北口駅前

サンクリア

TEL&FAX (042) 368-6368

府中グリーンプラザ 会議室・和室等を御利用下さい。10名様～250名様
府中市府中町1-1-1グリーンプラザ3F

カザミは、

お客様のニーズに合わせた

たれとソースを

作ります。



営業本部 / 工場 〒326-0044 栃木県足利市助戸1の26
TEL02884(41) 25227 FAX02884(44) 2618
本社 / 〒103-0001 東京都中央区日本橋小伝馬町2番4号柿沢ビル5階
TEL03(5695) 1671

たれとソースの総合食品 株式会社 カザミ



事務局だより



1. 会費納入のお願い

会費は同窓会活動の原動力です。正会員は同封の払込票にて次のいずれかの金額を納入してください。

終身会費30,000円または年会費1,500円

- ◇農工通信に払込票が同封されていない方は納入済です
- ◇過去に遡って納入の必要はありません

2. メールアドレスの新規登録、住所・勤務先等の変更届けのお願い

事務局では同窓生への各種連絡にスムーズに対応するため、メールアドレスの新規登録をお願いしています。

同窓会ホームページ [\[会員情報（住所変更など）\]](#) から、24時間いつでも登録、その他の変更届けができますので是非ご利用ください。従来通り、変更連絡票はがきやメール・電話など、いずれの方法でも受付けますので住所、勤務先等の変更があった場合は、すみやかに同窓会事務局までご連絡ください。

なお、同窓会が所有している会員の個人情報の公開については、ご本人の意向に沿って管理・運営し、個人情報保護には万全を期しております。

3. 同窓会ホームページ「ギャラリー」の作品募集

写真や絵（日本画、水彩画、油絵）、版画など内容は自由です。

200字程度の紹介文を添付して同窓会までお送りください。

送っていただいた作品の中からホームページのトップ画面や農工通信の表紙も飾らせていただきます。

みなさまの力作を奮ってご送付ください。お待ちしております。



4. Facebook活用のお願い

同窓会ホームページ [\[会員交流広場\]](#) では、Facebookを利用した会員のコミュニケーションの場を提供しています。

Facebookの利用には簡単な登録が必要となりますので、詳しくは同窓会ホームページ [\[会員交流広場\]](#) をご覧ください。

また、部会・支部でFacebookページを開設された場合は、リンクを貼らせていただきますので、同窓会事務局までご連絡ください。



ツレヅレ、ナルママニ

池谷 紀夫（農S49）

原稿を書いているのは、急に気温が下がった8月下旬です。本年は、相次ぐ台風とその後の集中豪雨により、全国各地で被害が出ております。比較的天候が安定している東京

の府中の地で、皆様の安全を祈っております。

同窓会事務局では事務局長と女性スタッフ4名が、通常総会・理事会の開催、農工通信87号の制作・発送も終わり、現在は返信していただいた動静調査ハガキの情報入力や同窓会パンフレットの作成など、毎年の流れの中で日々の仕事に勤んでいます。

私も就任後一年が経過して様子が少し分かってきたので、新しいことに取り組もうかと思っています。もちろん常務理事会の承認を得た上での活動になりますが、「農工大学の歌のDVD化」「思い出の写真のアーカイブ化」など通常業務のほかにもやれたらと考えています。

7月下旬に、高等農林時代の先輩がお亡くなりになり、間際まで高等農林の校歌（現在の東京農工大学農学部部歌）を口ずさんでいらっしやっただとお話を聞き、胸が熱くなる思いでした。生前に、歌詞と譜面をお送りしたとこ

ろ、ご長男の方が葬式の当日、高等農林の校歌を音源化して流して下さったそうです。

また、8月に入り、やはり高等農林時代の先輩がお亡くなりになり、その義娘さんから当時の卒業アルバムや資料・記念の品などを寄贈していただきました。実の息子さんにも高等農林時代のお話はなされたことがなかったようですが、アルバムは実に保存状態が良好で、大事に保管なさっていたことがわかりました。アルバムの中には、軍事教練の写真などがあり、戦時下の先輩方がどのような思いで学問に向かっていたのか思いを巡らせた。

同窓会は、現役の学生さん（準会員）やその保護者の方（賛助会員）、卒業したばかりの方から戦前の卒業生の方まで、現在農工大に勤務なさっている方など実に多くの方々によって組織されております。同窓会事務局は、これらの方々とは何かの形で触れ合うことができたいことを望んでおります。DVD化やアーカイブ化が、触れ合うきっかけ作りになればいいと思います。農工通87号でお願いした思い出の画像についてですが、今後とも募集を続けますのでよろしくお祈りします。

農工通信88号が皆様のところに届くのは、平成27年が始まった頃かと思いますが、平成27年が良い年でありますように。今年もよろしくお祈りいたします。

お知らせ

同窓会会則改正により、平成25年度の総会から正副会長・支部長を始め、部会・支部から推薦のあった理事や代議員のほかに、60人以内の一般の会員も構成員に加えました。
毎年1月の同窓会ホームページにて募集しますので、奮ってご応募ください。

農工通信への寄稿・ご感想 お待ちしています！

- わが母校「農工大」への想いや激励はありませんか？
- 同窓同士の絆を深め、社会へのお役立ちのご提案は？
- 同好の士の交流も深めたいものです。

「農工通信」（後期号・毎年初発行）は同窓皆様の情報誌です。編集・作成も同窓生によるものです。気兼ねなく、ジャンルに捉われず、ご寄稿を期待しています。

たとえば、農工大への注文、大学時代の思い出、社会人としての経験、趣味のおもしろさ等々、同窓生交流の呼びかけも歓迎です。また、この「農工通信」は現役の学生には一つの社会人との交流の場・手段にもなります。他国立大学同窓会では、現役学生への支援に力を入れています。学生のためのご寄稿も大歓迎です。

質問・ご感想もお待ちしています。

「農工通信」編集委員会 nokotusn@cc.tuat.ac.jp



編集後記 Editor's note

明けましておめでとうございます。今回は、88号と縁起の良い号数です。これを読まれた皆様が笑って楽しい1年を過ごせることを祈念します。今回は、トップ記事に西川公也先輩の大臣就任のインタビュー記事を掲載することができました。農工大へのエールを感じる内容です。2番目の記事は、本学の留学生で、帰国後インドネシアの商務大臣をはじめ主要ポストについて、農工大に多くの留学生を送っていただいているギナンジャール氏に、140周年記念式典での講演原稿を寄稿していただきました。そのほか、留学生から2件寄稿があり、今後も増やしていきたいと思えます。すでにこの正月号の発行は定着し、寄稿も自然に多く集まるようになってきました。内容も様々な分野で寄稿していただき、楽しめる農工通信になってきたと感謝しております。ただ、女性の投稿が2件と少ないので、OGの方には積極的に寄稿していただきたくお願いいたします。

広報・情報部長 亀山秀雄（化工S48）

編集委員：深水智明（織工S38）、畠山晃（林S40）、大亀哲郎（農工S46）
峰松敏夫（農S47）、金子由実（織高S51）、荘司雅通（電情H9）

農工通信 第88号

発行日 平成27年1月1日

発行所 東京農工大学同窓会

連絡先 〒183-8538 東京都府中市晴見町3-8-1 東京農工大学同窓会事務局

TEL 042 (364) 3328 FAX 042 (335) 3500

e-mail info@tuat-dousoukai.jp URL <http://www.tuat-dousoukai.org>

口座振替 00120-9-93147（加入者負担）

加入者名 東京農工大学同窓会

印刷所 小野高速印刷株式会社

〒870-0913 大分県大分市松原町2-1-6

お中元、お歳暮、贈り物に最適
 部会、支部会、同窓会でも
 ぜひご賞味下さい。

[しょうてんろく]
賞典禄
 農工大ブランド本格焼酎



原酒 (芋)

原酒 (麦)

米焼酎

芋焼酎

麦焼酎

長期貯蔵酒 (米)
 (創基 140 周年記念)

本学では、農学部附属広域都市圏フィールドサイエンス教育研究センター(FSセンター)で栽培した原料(米・芋・麦)をもとに製造した農工大ブランドの本格焼酎「賞典禄(しょうてんろく)」を販売しています。
 「ご好評いただいております「賞典禄(しょうてんろく)米・芋・麦の本格焼酎に加えて、芋・麦の熟成した原酒もろい踏みとなり、ますます品々るえが豊富になりました。」
 この原酒は、本格焼酎の個性そのものが凝縮されている焼酎で、一味違う深い味わいを楽しめるのは是非賞味下さい。

賞典禄 FAX 注文票 以下のとおり注文します。

東京農工大学 FS センター 宛 FAX : 042-367-5801

【ご注文内容】		平成	年	月	日
原酒 芋焼酎 (2,700 円) 38 度 720ml	本	米焼酎 (1,700 円) 25 度 720ml	本		
原酒 麦焼酎 (2,700 円) 43 度 720ml	本	芋焼酎 (1,700 円) 25 度 720ml	本		
長期貯蔵酒 米焼酎 (2,000 円) 41 度 720ml (創基 140 周年記念)	本	麦焼酎 (1,700 円) 25 度 720ml	本		
焼酎 米・芋・麦 3 種セット (5,000 円) 25 度 720ml x 3	セット	合計注文金額		円	

【ご注文者様情報】		フリガナ	
お名前			
住所	〒		
電話番号		FAX 番号	
生年月日	T.S.H 年 月 日	※年齢確認をさせていただく場合がございますのでご了承願います。	

- 【ご注意】
- ※1 お支払いは代金引換またはクレジットカードになります。詳しくは下記 URL をご覧下さい。ただし、FAX でご注文された場合のお支払いは、代金引換のみとなりますので、ご注文者様以外への配送は致しかねます。
 - ※2 ご注文いただいた上記金額の他に、送料 (5,000 円以上は無料) 及び代金引換手数料 (代金引換額に応じた所定の金額) が必要になりますので、予めご了承願います。
 - ※3 本注文票により収集された個人情報は、賞典禄の販売以外の目的には使用いたしません。

ネットショップ : FS センター農工夢市場ネットショップ

<http://www2.enekoshop.jp/shop/noukoudai/>

問い合わせ先

農学部附属広域都市圏フィールドサイエンス教育研究センター事務室

TEL 042-367-5812